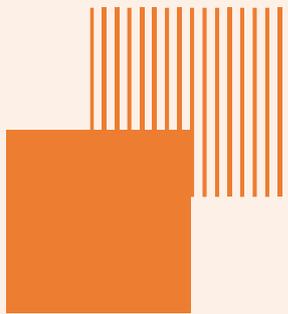


令和7年3月作成

# 東京都ソーシャルスキル トレーニング(SST)ガイド



東京都福祉局障害者施策推進部施設サービス支援課



## 目次

はじめに .....	2
SST の概要 .....	3
SST とは .....	3
SST の目的.....	5
SST の効果.....	6
アセスメントやモニタリングの方法.....	6
支援プログラムの提供.....	8
SST 支援モデル事業（令和 5~6 年度実施） .....	9
モデル事業の内容 .....	9
取組事例.....	9
SST モデル事業を実施した事業所及び心理士からの声 .....	12
SST モデル事業における東京都からの講評 .....	13
SST 想定事例.....	14
さいごに .....	51

はじめに

令和3年度に東京都が都内の障害児通所支援事業所を対象に実施したソーシャルスキルトレーニング（以下「SST」という。）実態把握調査（以下「SST実態把握調査」という。）によると、半数以上の事業所がSSTを実施していると回答したものの、SSTを実施していない事業所では、「SSTの正しい方法が分からない」という回答が最も高く50.4%となっており、実施に当たっての課題があることが分かりました。また、SSTの今後の活用意向については、「活用したい／どちらかといえば活用したい」と回答した事業所が87.5%あり、多くの事業所がSSTを療育に取り入れたいと考えていることが分かりました。

SSTは子どもたちが将来、社会の中で過ごしていくための準備として、教育や就労支援等の場でも広く行われています。障害児通所支援事業所においても、SSTを取り入れることで、質の高い支援につなげ、子どもたちの「できること」を増やし、社会活動をスムーズに進めることができるようになると考えられます。

SST実態把握調査により判明した課題を踏まえ、東京都では令和5年度から令和6年度にかけて、障害児通所支援事業所に臨床発達心理士等を派遣し、事業所の支援方法や支援内容を観察し、助言するSSTモデル事業を実施しました。

「SSTガイド」は、SSTモデル事業での取組や事例など、SSTに関する情報をまとめています。本ガイドが、SSTを現在実施している、または今後実施予定である事業所などにおいて、日頃の支援の一助になることを願います。

## SST の概要

### SST とは

SST とは、社会で生活していくために必要なスキル（ソーシャルスキル）の考え方や行動方法を学び、身に付けるための支援（トレーニング）であり、障害児への多様な支援の一つです。ソーシャルスキルは、障害種別や障害の程度、年齢により個性があり、社会情勢等によっても変化します。ソーシャルスキルを身に付けるために、特別な支援プログラムが必要ということではありません。様々な支援場面において、子どもたちの特性に応じた声掛けや環境設定を行うことだけでもソーシャルスキルの獲得につながる場合があります。

SST を実施するためには、子ども一人ひとりの状態を段階的に把握する必要があり、よりきめ細やかなアセスメントやモニタリングが求められます。また、「本人が自己理解を深めること」、「保護者が子どもの障害特性を理解すること」、「友だちなどに障害特性を理解してもらうこと」、「他者に対し必要に応じて援助要請ができること」など求められる支援は多岐にわたり、発達段階に応じて身に付けるべきスキルも異なります。

下記の表は、SST 実態把握調査で、事業所が取り組んでいると回答した SST の実施例です。実施例について、子どもが「できる/できない」と一義的に判断するのではなく、マイルステップを設定し、段階的にスキルを身に付けるための支援を提供することが必要です。

### 事業所における SST の実施例

身だしなみに関すること	身辺整理、トイレの使い方
学習に関すること	読み・書き
移動に関すること	交通機関の利用の仕方
就労に関すること	ビジネスマナー、調理、工作、面接時の対応
その他の生活スキル	スマートフォンでの連絡の仕方（電話のかけ方）、避難訓練、時間管理、声の大きさ
情緒に関すること	自己肯定感、気持ちのコントロール、アンガーマネジメント

※SST 実態把握調査（令和3年度）より

例えば、「一人でトイレに行く」という目標設定をした場合、トイレに行きたいことを伝えることができなかつた子どもが、トイレに行きたいと伝えることができるようになることも、段階的なソーシャルスキルの獲得と言えます。その後、トイレの使い方を覚える、支援員の援助を受けてトイレに行く、一人でトイレに行くことができるというように、段階的に目標を達成することで、「トイレを使う」というソーシャルスキルが身に付いたことになります。

放課後等デイサービスガイドラインには、一人ひとりの子どもの発達過程を理解する目安として発達段階区分が記載されています。すべての子どもに対して当てはまるものではありませんが、必要なソーシャルスキルの目安として活用してください。

### 参考：発達段階区分（一人ひとりの子どもの発達過程を理解する目安）

おおむね 6 歳～8 歳（小学校低学年）

※放課後等デイサービスガイドラインより抜粋

- こどもは学校生活の中で、読み書きや計算の基本的技能を習得し、日常生活に必要な概念を学習し、係や当番等の社会的役割を担う中で、自らの成長を自覚していく。一方で、同時にまだ解決できない課題にも直面し、他者と自己とを比較し、葛藤も経験する。
- 遊び自体の楽しさの一致によって群れ集う集団構成が変化し、そこから仲間関係や友達関係に発展することがある。ただし、遊びへの参加がその時の気分が大きく影響されるなど、幼児的な発達の特徴も残している。
- ものや人に対する興味が広がり、遊びの種類も多様になっていき、好奇心や興味が先に立って行動することが多い。
- 大人に見守られることで、努力し、課題を達成し、自信を深めていくことができる。その後の時期と比べると、大人の評価に依存した時期である。

おおむね 9 歳～10 歳（小学校中学年）

- 論理的な思考や抽象的な言語を用いた思考が始まる。道徳的な判断も、結果だけに注目するのではなく、動機を考慮し始める。また、お金の役割等の社会の仕組みについても理解し始める。
- 遊びに必要な身体的技能がより高まる。
- 同年代の集団や仲間を好み、大人に頼らずに活動しようとする。他者の視線や評価に一層敏感になる。
- 言語や思考、人格等のこどもの発達諸領域における質的变化として表れる「9、10歳の節」と呼ばれる大きな変化を伴っており、特有の内面的な葛藤がもたらされる。この時期に自己の多様な可能性を確信することは、発達上重要なことである。

おおむね 11 歳～12 歳（小学校高学年）

- 学校内外の生活を通じて、様々な知識が広がっていく。また、自らの得意不得意を知るようになる。
- 日常生活に必要な様々な概念を理解し、ある程度、計画性のある生活を営めるようになる。
- 大人から一層自立的になり、少人数の仲間で「秘密の世界」を共有する。友情が芽生え、個人的な関係を大切にようになる。

- 身体面において第2次性徴が見られ、思春期・青年期の発達の特徴が芽生える。しかし性的発達には個人差が大きく、身体的発育に心理的発達が伴わない場合もある。
- 個々のこどもの性的な発達段階や性への興味・関心に応じ、心や身体の発育や発達に関して正しく理解することができるよう、性に関して学ぶ機会を多く作ることが重要である。

#### おおむね 13 歳以降（思春期）

- 思春期は、こどもから大人へと心身ともに変化していく大切な時期であり、第二次性徴などの身体的変化や精神的変化に戸惑いを感じる時期である。こうした戸惑いと親からの自立を目指した一連の動きは、反抗的あるいは攻撃的な態度として表れることも多く、家族を含め周囲の大人の対応によっては情緒的・精神的に不安定となる危険性がある。
- この時期、共通の立場にある仲間とお互いに共感し心を通じ合わせることで、危機を乗り越えていくことも可能となる。
- 一方で、同じ年齢や同性の仲間との間に生じるストレスや心理的ショックなどが「劣等感」となって定着してしまうこともある。
- 思春期前に培われた自己有能感を基盤として、大人とだけではなく仲間との関係性も重視し、進学や就労など次のステージに向かう力が生まれるようにサポートすることが求められる。
- 個々のこどもの性的な発達段階や性への興味・関心に応じ、心や身体の発育や発達に関する正しい理解をもとに適切な行動をとることができるよう、性に関して学ぶ機会を多く作ることが重要である。

#### SST の目的

放課後等デイサービスガイドラインには、障害児支援の5つの基本理念として、「障害の特性を踏まえたニーズに応じた発達支援の提供」、「合理的配慮の提供」、「家族支援の重視」、「地域社会への参加・包摂（インクルージョン）の推進」、「事業所や関係機関と連携した切れ目のない支援の提供」が挙げられています。5つの基本理念のうち、主に「地域社会への参加・包摂（インクルージョン）の推進」のための一つ的手段として考えられるのが SST です。

ソーシャルスキルを獲得し、社会生活への般化に結び付けるために、SST を実施する際は、以下の2点を意識して取り組んでください。

- ① 子どもの発達段階に応じ、社会で必要な考え方や行動を学び、地域での生活の対人関係や社会活動を円滑に行えるようにすること

② 学んだ知識や行動を、関係者や保護者との連携のもと、日常の学校や家庭等の社会生活に般化できるようにすること

子どもが一人で解決する力を得ることだけではなく、自分自身の強みや弱みを知って、必要に応じて、他者に援助を伝えられるようにすることも、SST の目的の一つです。

SST を行う事業所が増えていくことで、社会に出たときに一つでも多くの課題や困難を乗り越えたり、回避できる子どもが増えていくことを期待しています。

### SST の効果

適切な SST を継続することで、本人のソーシャルスキルの獲得はもちろんのこと、保護者や支援員についても以下の効果が見込まれます。

子ども	<ul style="list-style-type: none"><li>・困難さが改善されることで、人と関わることへの不安の低減、集団生活や社会生活の場での適応が促進する</li><li>・自己理解や他者理解、自己肯定感の醸成、自己表現手段の広がりにつながる</li></ul>
保護者	<ul style="list-style-type: none"><li>・子どもの特性の理解や障害受容が促進する</li><li>・子どもの特性、障害に応じた日々の関わりや養育につながり、良好な親子関係を築くことにつながる</li></ul>
支援員	<ul style="list-style-type: none"><li>・子どもの特性の理解が促進する</li><li>・支援方法等の検討や振り返る場ができることで、適切な支援につながる</li></ul>

子どもや保護者、支援員が共通認識を持たなければ、SST の十分な効果は得られません。支援目標を段階的に定める上で、子どもの現在地を正しく理解することが必要です。また、SST を始めてすぐに効果が出るものは多くありません。子どもたちの「できる／できない」の達成度だけが支援の効果ではなく、支援過程の中で、「上手く取り組めたことを積極的に褒める」「上手くいかなかった原因を突き止め、次回につなげる」など、支援員の支援に対する姿勢の変化も効果の一つです。子どもたちに自己肯定感を芽生えさせるために、成功体験を多く積み重ね、達成感を得ることができるよう支援を提供することが、SST の第一歩になります。

### アセスメントやモニタリングの方法

SST を実施するためには、本人や保護者へのアセスメントやモニタリングを綿密に行うことが必要です。その結果、本人や保護者、支援員と共通認識を持つことにつながります。

アセスメントやモニタリングをする際は、支援時の様子、子どもや家族への面談等により、5領域（「健康・生活」、「運動・感覚」、「認知・行動」、「言語・コミュニケーション」、「人

間関係・社会性)の視点等を踏まえ、「知識(認知)」「言語的行動」「非言語的行動」の状態を適切に把握することが大切です。

知識(認知)	発言内容の理解、行動するタイミングの把握など
言語的行動	話している内容の正誤、言葉遣い、話の組立て方など
非言語的行動	アイコンタクトや声の大きさ、表情、相手との距離感など

アセスメントの際は、本人の弱点や苦手な部分のみならず、得意な部分や好きなことについても、目を向けることが必要です。子どもの特定の行動に着目し、「どうして得意(できる)なのか」、「どうして不得意(できない)なのか」を知ることが、子どもの状態を適切に把握することの基本となります。普段は得意な行動でも、目標が過大な場合は、できない行動になることもあり、子どもが不得意に感じてしまうことがあります。そうならないように、子どもの状態を正しく把握しなければなりません。日頃から、子どもの様子を注意深く観察し、反応や言動の小さな違いを見付け、より良い支援の提供を目指してください。

子どもの状態を把握するためのアセスメントやモニタリングの方法として、以下のような例があります。

行動観察	<ul style="list-style-type: none"> <li>・共通のチェックリスト(※)を用いて、複数の目で行動観察をする。</li> <li>・施設での行動のみならず、学校等の複数の場の状況を観察することが望ましい。</li> </ul>
子ども本人や保護者からの聞き取り	<ul style="list-style-type: none"> <li>・困り感や学校、家庭での様子などを聞き取る。</li> <li>・本人からは、苦手な部分のみならず、得意な部分や好きなことについても聞き取る。</li> </ul>
関係機関からの情報提供	<p>(教育分野)</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・保護者の同意を得た上で、特別支援教育コーディネーター等から個別の教育支援シートの提供を受ける。</li> </ul> <p>(医療分野)</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・児童精神科等に通っている場合、保護者の同意を得た上で、医療情報の提供を依頼することが望ましい。</li> <li>・日頃から主治医等との連携体制を整えておくことも重要。</li> </ul>

(※) チェックリストの内容は、簡素で分かり易く、経験年数や職種を問わず、現場の様々な支援員が活用できるものが望ましい。

まずは、「行動観察」によって、子どもの現在の状態を把握し、「子ども本人や保護者からの聞き取り」及び「関係機関からの情報提供」によって、子どもの状態と周りからの評価の違いを確認します。多角的な情報から子どもの状態を把握することで、適切な支援につながる

ります。

ただし、評価するために、事前に評価方法や指標を定めていたとしても、評価基準が支援員によって異なっていると、正確な評価が行えません。

例えば、「丁寧な文字を書くことができる」という指標があった場合に、「丁寧」の評価基準を支援員の中で統一していなければ、支援の評価が異なってしまう、正しい評価になりません。日頃から、支援員同士で評価基準を照らし合わせ、子どもの言動や行動の見方や考え方を整理しておくことが必要です。

また、子どもが長時間過ごす場所である家庭や学校での様子を知ることで、事業所での行動が般化されているかを確認できます。事業所内では上手くいくことも、事業所の外に出ると上手くいかないことが多くあります。子どもの生活にソーシャルスキルが般化されているかを確認してください。

## 支援プログラムの提供

子どもたちに支援プログラムを提供するにあたり、アセスメントやモニタリングを踏まえ、児童発達支援管理責任者が個別支援計画を作成していますが、支援員の意見が反映されていなければ、適切な支援目標になりません。支援目標が過大で、子どもの発達段階に合っていないと、支援目標に到達することが難しくなります。子どもが取り組む日々の支援プログラムの中で成功体験が少ないと、苦手意識につながります。SSTについても同様で、同じ年齢の子どもの場合でも、その時点で身に付けなければならないソーシャルスキルは、必ず同じになるわけではありません。子どもの支援に携わる支援員の意見を反映しながら、段階的に支援プログラムを提供することが必要です。

また、提供する支援の目的が異なっていれば、同じ支援内容だったとしても、子どもに対して適切な支援になっているかどうかの評価が異なります。

例えば、気持ちの切替えが難しい子どもや注意されると不穏になってしまう子どもがいる場合、事業所では好きなことだけをしてもらい、パニックにならないように心掛けているとします。心を落ち着かせることを支援の目的としている場合は適切な支援ですが、気持ちの切替えをスムーズにできるようにすることを支援の目的としているのであれば、適切な支援になりません。支援目標がどのようになっているか、その日に提供する支援の目的はどういったものなのかを支援員全員で共有しておかなければなりません。

支援内容が同じだったとしても、子どもたちへの声を掛けるタイミングや言葉遣いなど、それぞれの障害特性に配慮しながら、工夫する必要があります。支援員同士で適切な支援方法はどのようになっているかを確認し合い、適宜見直しを図りながら、より良い支援を提供してください。

## SST 支援モデル事業（令和 5~6 年度実施）

### モデル事業の内容

東京都では、令和 4 年度に「東京都ソーシャルスキルトレーニング支援在り方検討会」で SST の支援の在り方を検討した結果を踏まえ、放課後等デイサービス等の支援の質の向上や SST の支援の在り方について検証することを目的として、令和 5 年度から令和 6 年度にかけて SST 支援モデル事業を実施しました。内容は、東京都が選定した放課後等デイサービス事業所に対し、心理士を派遣し、事業所の支援員に対して SST に係る相談、助言等の支援を行うものです。

心理士の専門的な見地から、主に（１）対象児の障害の状態の把握を行い、SST の必要性の有無や内容について、当該施設の支援員等に対し助言する、（２）当該施設における SST の実施状況を観察し、当該施設の支援員等に対し助言する、（３）対象児の支援について、必要に応じて保護者との面談に立ち会い、助言する、（４）対象児のアセスメントについて、施設支援員等に必要な助言などを行いました。

### 取組事例

モデル事業を実施した際に判明した課題について、心理士が助言した事例を紹介します。全ての子どもに当てはまるものではなく、子どもの状態や特性、施設の状況により異なるため、参考として取り扱ってください。なお、事例については、個人の特定を避けるため、一部内容を変更しています。

#### 【ケース①】

課題
誰でも自由に療育道具を使用できる状態であり、いつも特定の子どもが占有してしまっている状態であった。
助言内容
使用予約表を作成し、子どもが自由に使用できる状態ではなく、貸出ルールの中で療育道具を使用できるようにする。
成果（変化）
全員が同じルールの中で過ごすことで、特定の子どもの占有を抑制し、順番を待つというスキルが獲得できる。また、各々の子どもが自分の時間になれば使用できるという安心感を得ることにもつながった。

### 【ケース②】

課題
子どもが失敗した際に「惜しかったね」や「次頑張ろう」など、漠然と声掛けを行っていた。
助言内容
「〇〇までは上手くできていたよ」「次は〇〇を意識してみよう」など、肯定的な言葉や正しい行動を短く端的に子どもに伝え、子どもの理解を得やすくする。
成果（変化）
子どもの気持ちの切替えが早くなる傾向が見えた。また、支援員は子どもを注意深く観察するようになり、子どもの細かな変化や仕草に気付けるようになった。

### 【ケース③】

課題
学習療育において「足し算をできるようにする」という目標を立てて支援をしたが、なかなか椅子に座ろうとしない。
助言内容
ターゲットスキルが過大になっていないかを常時確認し、必要に応じて段階的なスキル獲得となるよう見直す。 (例：短時間着席し、学習を開始することを目標とし、徐々に時間を延ばしていく)
成果（変化）
小さな目標達成を積み重ねていく中で、自発的な学習につながった。また、支援員もターゲットスキルに問題がないか注意深く観察するようになった。

### 【ケース④】

課題
帰り支度を子どもが嫌がったり、自発的に行動を行わないときに、すぐに支援員や保護者が手を差し伸べていた。
助言内容
子どもができることを把握し、最低限の補助に努め、可能な限り自主的な行動を促す。
成果（変化）
自主的な行動を積み重ねることで、子どもに責任感が芽生え、否定的な行動や言動が見られなくなった。

【ケース⑤】

課題
支援の切替えや次の行動を促す際に、上手く行動に移せない子どもがいて、時間がかかってしまう。
助言内容
指示を出す際に声だけで行うのではなく、絵カードを用意し、視覚的にも伝えるようにする。
成果（変化）
指示が通りにくい子どもが、自分が取るべき行動を理解し、適切な行動につながった。また、支援員同士で分かりやすく伝えるための方法を意見交換することが多くなった。

【ケース⑥】

課題
適切な行動ができたり、できなかつたりを繰り返しており、スキルの定着になかなかつながらない。
助言内容
「〇〇してくれてありがとう」「●●だからダメだよ」など、褒めたり、指摘する際に、理由を付けて発言する。
成果（変化）
子どもが良いこと、悪いことの意味を理解しやすくなり、適切な行動をすることが多くなった。また、支援員同士でも声掛けの方法を話し合うようになった。

【ケース⑦】

課題
皆と同じことをすることが苦手な子どもが、ゲームに興味なくなると、その場を勝手に離れてしまう。
助言内容
「その場を離れない」ことを目標とするのではなく、まずは「勝手に」離れないことを目標とし、「〇〇へ行ってもいいですか」などの承認を得るように促す。
成果（変化）
支援員が段階的な支援目標の立て方を理解し、他の子どもにも応用することができた。

【ケース⑧】

課題
日によって行動にむらがあり、意欲のコントロールが難しいため、支援につながらない日がある。
助言内容
本人の努力が見える化するため、評価シート（カレンダー）を作成し、課題ができたときには評価シートに好きな絵を描いてもらうようにする。
成果（変化）
本人が達成感を得られることになるとともに、「次に来た時はここに絵を描いてね」と促すことで、課題以外にも目標が立ち、支援につながる日が増えた。

上記のほかにも、「歩いて移動しよう」ではなく、支援員が「移動はどうする？」と子どもに聞き、「歩いて」と答えてもらうことで、自分の行動に自覚を促したり、1日を楽しかったかどうかを答えてもらうだけではなく、シールの色で示してもらい、視覚的にも感情の様子を分かりやすくするなど、様々な工夫がされていました。支援に正解があるわけではありませんが、少しの工夫や子どもの状態を適切に理解することによって、子どもたちへの影響が変わってきますので、支援員同士での話し合いを重ねていくことが必要です。

SST モデル事業を実施した事業所及び心理士からの声

SST モデル事業を実施した事業所や心理士から、実績報告として様々なご意見をいただきました。その一例をご紹介します。

事業所	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 支援内容を専門的な視点から振り返ることができた</li> <li>・ 普段の声掛けなどが SST につながっていることが分かり、すぐに取り入れられる内容が多かった。</li> <li>・ 支援員同士で支援に関するコミュニケーションが増えた。</li> <li>・ SST を意識して支援することで、子どもの反応が変化していく様子を伺えた。</li> <li>・ 子どもとの関わり方を少し変え、見守りや問い掛けを増やすことで、子ども同士で考えて行動する様子を伺えた。</li> <li>・ 支援環境や段取りなど支援前の準備が大切だと分かった。</li> <li>・ 「上手くできたね」「すごいね」など日常的に使用している言葉でも、「上手くできたね、すごく分かりやすいよ」や「○○できるのすごいね」など、ひとこと付け加えたり、褒めるタイミングの大切さを知ることができた。</li> </ul>
-----	---

心理士	<ul style="list-style-type: none"> <li>・支援員が支援の根拠を理解するきっかけとなっており、支援員の自発的な行動につながっていた。</li> <li>・普段の支援を SST の視点から振り返るだけで、支援の効果に大きな違いが出てくるのが分かった。</li> <li>・保護者の理解が必要であり、保護者の協力やサポートが得やすい環境作りが大切だと再認識できた。</li> <li>・支援のねらいや目的について、支援員間で共通認識を持っていないケースがあった</li> <li>・支援内容をもう少し段階的に区切って、スモールステップを意識すると更に良い支援ができる。</li> <li>・子どもの課題に対する取組の評価が支援員によってばらつきがないようにする必要がある。</li> <li>・学校や他事業所などとの連携が必要である。</li> </ul>
-----	--

#### SST モデル事業のまとめ

従来実施している支援の中で、ソーシャルスキルの獲得につながるものがたくさんあるにも関わらず、支援員が意識的に SST として支援を行えていないことが分かりました。そのような事業所においては、心理士のアドバイスにより、支援員が声掛けの方法を変えたり、子どもに伝わりやすい支援環境にするなど、支援員の意識や支援環境の小さな変化が、子どもの目標達成に大きな変化につながっています。

また、子どもの状態を適切に把握するためには、アセスメントやモニタリングが重要です。支援員は「子どもや保護者がどのように考えているのか」、「支援をしている時の子どもの様子はどうか」「できる時とできない時の違いは何か」など、日常的に意識して見る（聞く）ことで、効果的な支援（声掛け）の提供の差につながっています。

最後に、事業所の支援員だけでなく、保護者や学校の先生など、子どもの日常の中で接する「大人」が連携して同じ考え方のもとに支援に取り組むことができれば、子どもにとってより良い支援環境を作ることができます。事業所、学校、家庭で子どもに接する方法が異なっていると、子どもは困惑してしまいます。関係機関との連携や家族支援を並行して行うことが、一貫した支援の提供につながります。

支援員が子どもの状態や支援内容を正しく理解し、それぞれの子どもに適した支援を提供することが求められます。集団療育の場合には、子ども全員の課題に則した支援プログラムを提供することが難しいかもしれません。しかし、支援プログラムに課題がある子ども、課題がない子どもが混在し関わり合うことで、「相手のことを理解する」「他者と関わり合う」などの SST のきっかけになります。改めて、SST につながる場面がないかを支援員同士で話し合い、より良い支援プログラムを提供できるよう取り組むことが重要です。

## SST 想定事例

SST モデル事業を踏まえ、対応方法や考え方の例を示すため、想定事例を作成しました。一つの質問に対して、様々な考え方があることから分かるように、これをすれば完璧に対応できるというものはありません。支援を提供する中で、似たような事例があり、支援方法や考え方に迷いが出た際に、解決の糸口として想定事例を活用してください。

## 想定事例①【 小学校高学年 】



### 子どもの特徴

- ・ お礼や謝罪することが必要な場面や状況が理解しにくい
- ・ お礼や謝罪を言葉にすることや行動に表すことが苦手

### 支援内容

個別支援の中で、いろいろな場面設定したロールプレイを行う

### 支援のねらい

1対1で「ありがとう」と「ごめんね」の場面を覚えてもらい、他の子どもに対しても般化できるようにしたい

### Q-1

誰が何をしたのかを場面ごとに伝え、「ありがとう」と「ごめんね」のどちらかを選んで発言してもらうように促しているが、なかなか上手くいかない場合どうすれば良いか？

### ワンポイントアドバイス①

まずはワークシートに様々な場面を用意し、4コマ漫画のように示しましょう。子どもたちが多く経験する代表的な場面を作成し、その中にお礼や謝罪の場面を含めておくことで、展開を学習でき、理解を促しやすくなります。また、4コマ漫画には題名をつけておくと良いでしょう。

4コマ漫画の登場人物を演じてロールプレイングを行い、適切な行動を評価し、ロールプレイングを通じて相手はどう感じるかを伝えてお礼や謝罪を行うことのメリットを理解できるように導いていきます。さらに、支援員同士が演じた場面を見て、状況に近い4コマ漫画を選択し、お礼や謝罪を子どもに言うってもらうなど、変化をつけていくと学びが広がります。

### ワンポイントアドバイス②

「ありがとう」「ごめんね」を想定する場面で2択を選べない場合、子どもが言葉の意味や状況を理解できていない可能性があります。まず、支援の中で子どもが経験しやすい「ありがとう」や「ごめんね」が必要な場面をいくつか抽出します。例えば、「落とした物を拾ってもらったとき」の「ありがとう」、「うっかりぶつかったとき」の「ごめんね」などのイラストや写真を準備しましょう。日常的に目に見えるように、その他の挨拶の言葉（こんにちは、さようなら、またね等）を含めたイラストと一緒に壁面などに掲示しておき、支援員がそれらを示しながら使っていくことで、身近な言葉になると思います。

## Q-2

個別支援のロールプレイでは上手く行くのだが、小集団で同様の場面が起きたときに上手く行動できないため、支援員と一緒に「ありがとう」、「ごめんね」を言うようにしているが、ほかに工夫すべきことはあるか？

### ワンポイントアドバイス①

活動の中でお礼や謝罪が必要な状況が起きたときに、過去に学んだ事例（例えばイラスト、4コマ漫画等）の中のどの事例と似ているか考えてもらいましょう。似た事例を探し、題目を共有してから、相手に伝える言葉を決めて、「支援員に言ってもらおう」「一緒に言う」「一人で言う」など、本人の負担感に合わせて支援を行い、経験値を増やします。

過去に学んだ事例がないときには、今回の事例は新しい状況であったことを確認して整理し、理解を促すことが次につながります。

活動の中で場面が生じたときに、支援員はお礼や謝罪を行うことのメリットを実感できるよう振り返り、何が良かったかを記録し、メリットを可視化すると良いでしょう。

### ワンポイントアドバイス②

ロールプレイで「上手くいった」と本人も納得できたパターンは記録ノートやカードに「ありがとう達人シール」を貼っておき、時々見直します。見直すことで、記憶にも残りやすく、実際の場面で思い出しやすくなると思います。また、支援員は子どもが思い出しやすくなるように「この前、仲直りしたときのことは、記録ノートの『ごめんね』を思い出してごらん」などとヒントを与え、自分で気付けるように後押しします。思い出せなかったり、気持ちが高ぶったりして言えない場合は、記録ノートを開きながら支援員が代弁するという方法でも良いでしょう。

思い出するための援助はもちろんのこと、思い出しても上手く使えずに失敗経験を積み重ねてしまわないように、工夫していきましょう。

## 想定事例②【 小学校高学年 】

### 子どもの特徴

- ・運動や漢字の学習には一定の自信を持っていて積極的になる
- ・失敗をすると全てにおいて悲観的になり気持ちの立て直しが難しい
- ・困ったときにタイミング良く援助を求めることが難しい



### 支援内容

決められた時間内に行う個人課題（漢字）の学習支援

### 支援のねらい

間違えたときや、終了時刻の時点で作業の切りが悪かったときに、相談や援助を求めることができる

### Q-1

自信を持って提出した回答が間違っていたときに大きなショックを受け、時々、自傷行為になってしまう場合の対応はどうしたら良いか？

#### ワンポイントアドバイス①

事前に、①人は誰でも間違ふことがある、②間違ふことは成長のチャンス（「失敗は成功のもと」などのキーワードを教える）、③間違えたときの行動が大事、ということをお個別に伝えておきましょう。

また、支援員自身の失敗談とそのときの対処方法を短く話すことも、子どもにとっては安心材料になります。

実際に間違いがあったときには、子どもの気持ちをさり気なく代弁（「悔しいね」「残念だよ」などと言語化）した上で、修正方法（「消さなくても良いから横に書く方法もあるよ」「消すのを手伝おうか？」「1回指で書いてみると覚えるかもしれないね」など）や正しく覚えるための対処方法を簡潔にアドバイスして、上手くいくようにつなげていきましょう。

#### ワンポイントアドバイス②

予測しないことが起きたときに、自傷行為になるのは、人に気持ちを収めてもらう心地良さや気持ちを発散する喜びを感じておらず、子どもとの信頼関係が積み上がっていない可能性があります。日常生活の中で小さなサインやエピソードを拾い、「イヤだと言って良いよ」「こっちが良いと言いたいんだよね」と気持ちを言語化し、周りの支援員が理解してくれていると感じる体験を積み重ねることが大切です。

また、誤りを突き付けるような言い方ではなく、「これだと思ったんだよね。でも、〇〇の方がもっと良いかもしれない」と、一度は答えを受け止め、提案として伝え、否定された気持ちにならずに、「それも良いかも」と子どもが受け入れてくれることもあります。

## Q-2

当日のスケジュールや時計は壁の見やすい場所に掲示しているが、終了時刻が近づくと焦りから気持ちが乱れてしまう際の声掛けはどうしたら良いか？

### ワンポイントアドバイス①

最初の予定を時間内に終わらせられない場合は、終了時刻の少し前に「あと5分だから、5分経ったときにやれているところまで頑張れば大丈夫。次回に続きをやろう。」「あと5分で慌てずにできるところはどこまでかな？自分で決めて良いよ。」「あと5分だから、ここまで（支援員が問題に印をつけてあげる）やって今日は終わりにしておこう。」などと口頭で予告し、目安や目標を伝えておくとも良いかもしれません。それでも終わらなかった場合、その時点での対処方法や次回に続きができることを伝え、安心感を与えられるようにすると良いでしょう。

### ワンポイントアドバイス②

終わりの時間を伝えて、時間内に全部終わりそうか、どこまでするのかを事前に相談しておくとも良いかもしれません。プリントの場合、終わりそうな枚数で開始し、時間が残っていたら、一枚ずつ増していくなどの提案をしてみましょう。見通しを持つことが難しく、時間の区切りで気持ちが乱れてしまう子どもには、あらかじめ、時間内で区切りがつく量を提供する配慮が大切です。自分でコントロールしてもらうというハードルをあげた支援より、気持ち良く終わった体験を積む方が優先の子どももいます。

きちんと時間内で終わったことを褒めて、時間内で終わった心地良さを積み重ねていくことで、見通しを持つ力につなげていきましょう。

### 想定事例③【 小学校高学年 】

#### 子どもの特徴

- ・不安感が強く、自分の行動に自信が持てない
- ・今後の見通しを立てることが苦手
- ・人に相談したいが、内容を上手く伝えることができない



#### 支援内容

終わりの会で今日の出来事を皆で話してもらう

#### 支援のねらい

事前に相談し話す内容を決めることで、子どもの不安を取り除き、少しでも自分の言葉で話せるようになることで自信につなげたい

#### Q-1

できるだけ自分の言葉で発言してもらい、必要に応じて声掛けを行い、発言を促した。終わりの会の前に今日はどのようなことを話すのか個別に練習しているが、対象児はいつも不安そうな顔をしているので、不安を解消するためにはどうすれば良いか？

#### ワンポイントアドバイス①

「不安を解消させる」という視点より「安心して今日の出来事を話せる」という視点での支援を考えることも大切です。事前の練習で、写真などを使い、視覚で確認できるヒントを用意しながら、言語化した方が言葉を想起しやすいかもしれません。また、たくさんの人の前で話すときに、他者からの視線で不安にななり、どこに視線を向けたら良いか決められず、視線が泳いでしまうこともあります。練習のときに聞き役としてパペットに話し掛ける練習をしておき、本番もパペットに視線を向けて話すようにすると、他者からの視線の不安を軽減できることがあります。

子どもが安心して話せるやり方を一緒に考えていき、成功体験を積んでいきましょう。

#### ワンポイントアドバイス②

人の前で話す場合、聞いている相手の反応がどのような反応か予測がつかないという点も安心できない理由の一つです。自分の伝え方の練習を行い、伝えることによるストレスを軽減するための工夫も大切ですが、発表する友だちに対して、どのような聞き方や言葉掛けがより良いのか、聞く側について、学んで練習することも助けとなるかもしれません。

発表する前に、友だちも同じように聞き方の学習をしていることや「友だちの反応を見てどう思ったのか教えてね」と予告することで、本人がすべきことが明確になり、緊張が高まることなく参加できるのではないかと思います。

## Q-2

次のプログラムを事前に伝え、気持ちの準備ができているときは問題ないが、伝え遅れたり準備が不十分だったりすると、黙り込んで、動かなくなってしまう。準備段階で気にかけておくべきことを教えてほしい。

### ワンポイントアドバイス①

事前予告が本人にとって大切な支援と考えるのであれば、まずは、それを徹底することが大切です。もしかすると予定が変更する可能性がある場合（例：晴れていたら公園、でも雨が降ったら事業所でゲーム）は、そのことも事前に伝えておきましょう。実生活の中で、予定が変更することはよくあることなので、「そういうこともあるよ」と、小さな体験の中で、経験値を上げていくしかありません。予測ができないことが起きた場合、支援員が慌てると不安を増長します。支援員が本人の気持ちの波を予測して、不安な気持ちを落ち着いて受け止めてあげましょう。不安になることを否定しないで、少しでも安心感を与えるように配慮することが大切です。

### ワンポイントアドバイス②

生活する中で困ることはいろいろな場面で起きます。困ったときに黙り込んで動かなくなり固まってしまうことで大人からの援助を引き出したり、その場をやり過ごしたりする経験を積んできているのかもしれませんが。

忘れ物をしたとき、指示が理解できなかったとき、友だちから嫌なことを言われたとき、不測の事態で対処の方法が見付からないとき、「困った」と一言言っても状況は様々ですが、その一つひとつの場面で困ったことを伝えることができるように「困ったときってどんなとき？～どうしたら良いか一緒に考えてみよう～」といった掲示を作成し、困ったときの行動を見える化すると、自分で対応する方法を見付けやすくなるかもしれません。

## 想定事例④【 小学校高学年 】

### 子どもの特徴

- ・好奇心旺盛だが好き嫌いが激しい
- ・他の子どもとのトラブルが多く、集団になじむことができない
- ・じっとすることが難しく、落ち着きがない



### 支援内容

トラブルになりやすい子どもとは班分けを行い、小集団で子どもが興味ありそうなカードゲームを行う

### 支援のねらい

制限時間を短く設定したゲームを数回行うことで、最後まで他の子どもとゲームをできたという経験を多く積んでもらいたい

### Q-1

興味がなくなったときに勝手に抜けて、一人でパソコンのゲームをしないようにしたいのだが、どうすれば良いか？

### ワンポイントアドバイス①

ゲームは勝ち負けが明確ではなく、短い時間で活動欲求を満たすものを用意しましょう。例えば、箱を積んだ山を、複数人でできるだけ早く離れたところに運びゲームです。制限時間を設定することで、子ども同士の勝ち負けではなく、共通目標への達成感を得られるものになります。まずは子ども同士の比較が生じないゲームが向いていると思います。

活動の実施回数は、先に決めますが、本人が「もっとやりたい」と声が出るくらいで終わりにするようにしましょう。本人が感じる集団活動の楽しみと負担感のバランスに注意を向けることが大切です。子どもの負担感は、活動の回数や箱の大きさ、友だちとの組合せなどでコントロールすることができます。

### ワンポイントアドバイス②

ゲームのルールや進め方を簡単にすると、分かりやすいというメリットがある反面、飽きてしまいやすいため、第2ステップ、第3ステップとルールの改定をしていきましょう。支援員が提案する改定ルールはいくつかのパターンを用意し、子どもが選べて、意見を取り入れられるようにすると、新たなモチベーションにつなげることができます。あまり複雑でないルールから始めることで「レベルアップ」という魅力も感じられるでしょう。

また、どうしてもその場を抜けてしまう場合は、「見学」、「応援役」、「得点係」など別の役割や方法での部分参加を提案すると、子どもの気持ちを尊重しつつ、集団参加を促すことにつながると思います。

## Q-2

ゲームに失敗すると必ず他の子どもに責任を押し付け、言い合いにつながってしまう。責任を押し付けないようにするにはどうすれば良いか？

### ワンポイントアドバイス①

少人数で取り組み、役割を分担しながら行うゲームから始めましょう。例えば、支援員が作った組立て見本を見て言葉で伝える役と、言葉を聞いて言葉通りに組み立てる役に分けて、組立て見本と同じものを2人で協力して作ることができるか確認するゲームなどが一つの例となります。組立て見本は、色鉛筆揃えやブロック積みなどシンプルなものが合うかもしれません。子ども同士の得意な側面が発揮できる組合せから行い、役割交代もしながら、自分の得意に気付くような声掛けをしていきましょう。

適切な行動が多くなってきたらスモールステップで人数変更や役割を増やすなど、計画的に難易度を上げていくと良いでしょう。

### ワンポイントアドバイス②

失敗がチームの結果に影響が少なく、皆で楽しめるものを用意することが大切です。例えば、目隠しした相手を簡単な障害物を避けて安全にゴールまで案内するゲームで、障害物（椅子、机、三角コーンなど）に当たらないようにゴール地点まで移動をサポートします。最初は手をつなぐ、次は口頭だけで誘導するなどレベルアップも可能です。勝敗ではなくゲーム活動そのものの楽しさを味わうことで、仲間同士の良好な人間関係が生まれます。慣れてきたら障害物の位置や目標タイムを相談して決めたりすると、モチベーションが増します。さらに、タイムを支援員のペアと子どものペアとで競うことで、勝敗のあるゲームへとレベルアップすることもできます。

## 想定事例⑤【 小学校高学年 】

### 子どもの特徴

- ・ 運動用具の準備、片付けの方法は理解しているが、今すべきことを認識できず一人で別の行動をしがちである
- ・ 上手くできない子どもに対して、指導者のような発言をしてしまう



### 支援内容

グループで行う運動活動の準備や片付けを短時間で行う

### 支援のねらい

一人では運べない用具を短時間で協力して準備、片付けをする

### Q-1

他の子どもが準備を始めたときに、すぐに行動できない場合は声掛けをしている。やる気は感じられるが、他の子どもの動きに合わせた行動ができない場合の支援方法はどうしたら良いか？

### ワンポイントアドバイス①

適切な環境作りとして、まず準備や片付けのときに不要な刺激が入らないように、必要のない物品はできるだけ子どもの視界に入らないように片付けるか覆いをおきましょう。必要な道具が容易に手の届く範囲に収納でき、外から見えない場合は何が入っているかが分かるように表示しておくことも大切です。

新しい活動の導入時等で慣れるまでの間は、用具の設置図（写真やイラスト）を見せたり、掲示しておき、全体指示の後に本人に対し、個別にどこに行き何をするかを簡潔に伝えましょう。必要に応じて支援員がその場でやり方を見せたり、子どもと一緒に片付けたりすることも良いでしょう。

### ワンポイントアドバイス②

やる気を感じられるとのことなので、問題は友だちの動きに合わせた行動が苦手ということでしょうか。その場合、指示理解の難しさや行動の組立ての苦手さなどの背景が考えられます。「〇〇さんと一緒に片付けて」という指示より、「〇〇さんの持っている机の反対側を持ってあげて」と具体的に指示することや、〇〇さんに「机の反対側を持ってと言ってあげて」と伝え方を指示するなどの工夫をしてみましょう。段取りや行動の組立てが苦手な場合は、どの順番でどこに何を運ぶのかが分かるように、やるべきことの順番のリストなどをホワイトボードなどに掲示しておき、あらかじめ運ぶ順番や役割を説明してから取り掛かってみましょう。

## Q-2

上手くできない子どもに対して、あたかも支援員のように注意したり指導的な発言をしたりしてしまう場合にどのような助言をしたら良いか？

### ワンポイントアドバイス①

まず初めに、上手くできる子どもに対しては、良い動きや練習方法等を肯定的に評価し、活動に集中できるようにしましょう。また、上手くできない子どもに対しては、支援員が近づいて個別に声を掛けて教えているところを見せましょう。

それでも他の子どもに関わりたい様子が見られた場合は、注意や助言の前に必要なこと（「頑張れ」「良いね」と短く言ったり、OKサインを出したりする等）があることや、お互いに助言し合うときのマナー（「僕（私は）こうしているよ。」「こうやったら上手くいったよ。」「このやり方を教えてほしいんだけど、どう？」等）があり、提案型やお願い型で言うと相手が気持ち良く練習できることを伝えると良いでしょう。

### ワンポイントアドバイス②

知識として行動の意味は分かっているけど、どう行動を起こせば良いのか分かっていない子どもの可能性があります。自分もできないのに友だちには指導してしまう子どもはよく見受けられます。その場合、支援員（大人）が教えたり説明したりする役割だということを伝えましょう。また、そのような発言をしたときに、発言に注目するのではなく、「〇〇くんは今、△△を◇◇さんと運んでください」と今すべきことを伝えるようにしてください。大人の注意は、他の子どもに対象児が「余計なことを言う」という印象を与えてしまい、他の子どもへの悪影響につながります。それらを配慮し、集団の中で他の子どもからの評価が下がらないようにしましょう。

## 想定事例⑥【 小学校低学年 】



### 子どもの特徴

- ・ 特定の支援員の対応しか受け入れられない
- ・ 言語化が苦手で、ボディランゲージになりやすい
- ・ 人と目線を合わせながら話すことが苦手

### 支援内容

いつもとは異なる支援員を同席させ、目を見て話すことをテーマにして「ごっこ遊び」を行う

### 支援のねらい

子どもが好きな職業の「ごっこ遊び」に他の支援員を参加させ環境に慣れてもらう。また、「目を見て話す」ことに焦点を当て、少しずつ課題の克服につなげたい

### Q-1

別の支援員が参加しようとするすると嫌がり、「ごっこ遊び」をやめてしまうのだがどうすれば良いか？

### ワンポイントアドバイス①

参加を拒否されてしまうのなら、「遊んでいるところを見て良いですか」と了承を得てみましょう。まずは、スモールステップで本人が受け入れられる範囲を探り、了承が得られなかったとしても、本人が必要としている物（おやつときのコップ等）を渡して、どのくらいの距離から始めると受け入れてくれるのかを試してみるのも良いかもしれません。始めから好きな遊びに介入せず、生活の中で距離を縮めてから、少しずつ受け入れてもらうような関係性を作っていくことも大切です。極端に特定の支援員だけしか受け入れられないことは、支援の幅を狭めてしまうので困ったことですが、多少、相性があることも理解してあげましょう。

### ワンポイントアドバイス②

言語化が苦手で特定の支援員でしか対応できない子どもの場合、相手に合わせることに自体に練習が必要な場合が多いと想定できます。一緒に活動する人を増やしたい場合には、活動はトランプやすごろくなどルールや終了がはっきりした活動にします。活動に参加できているのであれば、現段階で目を合わせることは目標としなくて良いでしょう。活動は2人から4人ぐらいまで人数が変わっても対応できるものが1番良いと思います。

支援員と二人で行った活動に人数を一人ずつ増やしていくために、誰を誘うのか選択肢を与えて、子どもに選んでもらっても良いかもしれません。

## Q-2

会話の中で「はい」「いいえ」で答えやすいような質問をして、言葉で返答を促すが、視線を向けてくれず、頷くことや首を横に振るだけになってしまう場合はどのような対応が必要か？

### ワンポイントアドバイス①

期待する効果を2つ掲げると目的を達成することが難しくなる場合があります。一つひとつの目的を達成するような場面を考えていきましょう。①目を合わすことが目的なら、支援員が物を渡すときに目を合わせるまで、渡さず離さない（本人があれ？と思い、表情を覗き込んで視線を合わせたら手を離す）。目を見たら手を放してくれることに子どもが気付くと、目を見るようになります。②言葉で応答することが目的なら、支援員が目をつぶって、「これは何？」と尋ねるゲームにすると、声を出してくれるかもしれません。「はい、いいえ」はジェスチャー（頷き等）に変換しやすいので、名称を答えるようなジェスチャーになりにくいやり取りを設定してみてください。

### ワンポイントアドバイス②

どうしても人間関係が一方通行になりやすい場合、せめて適切に返事をしてもらいたいと願い、そこに支援の力点が置かれることはよくあることだと思います。しかし、「はい」や「いいえ」と答える必要があることを上手く理解できないところも発達の特徴かと思われれます。コミュニケーションが一方向的にならないように指導するには、「はい」や「いいえ」の後に「〇〇さんはどうですか」等と質問を付けて支援を試みましょう。

まずは、質問を聞いていたか確認して、頷いてくれたのであれば、双方向のコミュニケーションが成り立っています。十分に評価に値する行動だと思いますので、段階的に目標設定をしていくと良いでしょう。

## 想定事例⑦【 小学校低学年 】



### 子どもの特徴

- ・体幹が弱く、じっと立っていることが難しい
- ・苦手なものに取り組むときは無気力になる
- ・場面の切替えが苦手

### 支援内容

おやつ終了後、全員が参加する平均台を使用した運動ゲーム

### 支援のねらい

体幹を鍛えるとともに、子ども同士で協力し達成した際の成功体験を与え、苦手意識を克服させたい

### Q-1

当日のスケジュールはホワイトボードに示しており、時間になったので参加を促したが、一人だけ参加しようとして、その場を長時間動かない場合はどのような工夫をすれば良いか？

### ワンポイントアドバイス①

予告したにも関わらず参加しない場合には、取り組みにくさがあると考えられます。例えば、活動内容に見通しが持てない場合は、活動を分かりやすく示すことが大切です。もし、活動を苦手に感じており、拒否を示している場合は、本人の思いを肯定した上で、「いつなら参加できるか」「一人ならやってみることができるか」「一度だけやってみるか」「見てから参加するかどうか考えるか」「平均台の高さや運動ゲームの内容に段階を設けたら参加できるか」など「参加する、しない」という選択肢ではなく「どのような活動なら参加可能か」と参加できる方法を相談し、取り組みやすいステップを設定することで、参加意欲を支えましょう。

### ワンポイントアドバイス②

活動内容が子どもにとって苦手意識があることや初めての場合は、事前に「明日は平均台を使ってゲームをするよ」などと予告しておきます。子どもの反応を見て参加が難しそうであれば、「やってみようかな」と思うことができる方法はどのようなものか希望を聞いて、支援員同士で相談しておきます。当日も、「おやつが終わったら平均台の運動ゲームをやろうね」と関心を持てるように事前に伝えておきます。子ども自身が参加の可否を選べるようにして、まず見学からという方法も良いでしょう。友だちがやっている様子を見て「こうやれば良いんだ」と思えたり、上手くできなくても大丈夫と感ずることができれば、徐々に参加につながるかもしれません。

## Q-2

必要に応じて指導員がサポートしながら支援をしていたが、上手くいかないことがあるとすぐやめてしまう。子どもが続けられるような方法を知りたい。

### ワンポイントアドバイス①

運動は楽しみながら行い、運動を通して気持ちよさを感じることで、また運動したいという気持ちになると言われています。スモールステップでできたことを楽しむことから行い、少しずつステップを上げていくことが続けられる秘訣です。友だちと協力してできたときの成功体験を積める活動の回数を多くしていきましょう。お互いにチャレンジしていることを評価し、その頑張りと同じグループの仲間と共有します。

身体の動きや感覚面の困難など、本人が取り組みにくい活動には本人なりの理由があります。もともと日常生活を送る上で、年齢に比べてぎこちなさや不器用さがある場合は、専門家への相談も有効かもしれません。

### ワンポイントアドバイス②

高さや幅の狭さに恐怖心があり、バランスが上手く取れずに落下してしまうと、「失敗した」と感じる場合があります。そのため、最初は「上手く落ちる練習」をゲーム感覚で行うと良いでしょう。「合図を聞いたら横に落ちる（降りる）」「〇歩進んだら落ちてまた乗る」など、子ども同士で声を掛け合って楽しめるようなルールにして遊ぶことで「落ちたらどうしよう」という気持ちが少なくなるでしょう。また、声を掛け合うことで、相手の動きや反応を見ることになり、コミュニケーションの土台作りにもなります。個別の目標を決める場合、他者と比較して劣等感を持たないように、一人ひとり異なる目標を設定すると良いでしょう。

## 想定事例⑧【 小学校高学年 】

### 子どもの特徴

- ・他の子どもへの関わりには積極的だが一方的なことが多い
- ・要点をまとめたり、気持ちを言葉で表現するのは苦手
- ・細かな作業が得意



### 支援内容

創作活動（皆で粘土を使用して、動物園を作る）

### 支援のねらい

誰がどの動物を作るのかを皆で話し合い、それぞれ担当した動物を作成することで他の子どもとのコミュニケーション方法を覚えてもらいたい

### Q-1

どうしてその動物を作りたいのかを子どもごとに順番に話してもらったところ、上手く表現ができず、前の子どもと同じ言葉を繰り返すことが多い場合はどうすれば良いか？

### ワンポイントアドバイス①

動物を選ぶ段階で、自分が本当に作りたい動物を選ぶことができるよう、動物の特徴や自分の経験などを思い出し、話し合ってもらおうと良いかもしれませんが、小学校高学年として説得力が足りない理由（「可愛い」「強そう」「動物園で見たことがある」「何となく」「好きだから」等）であったとしても、本人が表現できたことを認め、その言葉や表現を支援員が受け止めることが大切です。

全体の場で順番に発表する際に、咄嗟に言葉を思い出すことが難しい場合もあります。事前にメモを準備し、メモを見ながら答えられるようにしたり、事前にメモの準備ができない場合は、支援員が考えたいいくつかの選択肢からその場で選んで話してもらおうようにしましょう。

### ワンポイントアドバイス②

事前に動物園にいる動物の写真などを用意して、視覚的な支援の準備をしておく、写真などを見ながら作りたい動物を安心して決めることができます。その上で、事前に作りたい理由について写真を見ながら一緒に考えておき、あらかじめ、何と云うか紙などに書いておくのも良いと思います。「色が好きなのかな」「強いから作りたいのかな」と、本人の嗜好に合わせた気付きを促すことも大切です。上手く表現できずにお友だちの言葉を繰り返してしまったときには、「同じように考えたんだね」「同じところが気に入っているんだね」とただ単に真似したように受け取られない配慮の言葉を添えると、友だちも嫌な気持ちにならなくて済むと思います。

## Q-2

他の子どもが担当する動物を勝手に作ろうとしたので、「一緒に作ろう」と声を掛けるように促したところ、「一緒に作ろう」と言っただけで了承を待つことなく作り出してしまう。他の子どもと協力して作るようになってもらうにはどうすれば良いか？

### ワンポイントアドバイス①

対人関係のマナーとして、「相手の了解を得てから行動する」ことを伝えましょう。その際に相手に「一緒に作ろう。」と言って、「良いよ。」と返ってきたときに、「どのようにするかを相談」してから始めるように促すなど、行動の前に相談が必要なことを伝えると良いと思います。

他の場面でも「入れて」と「良いよ」、「貸して」と「良いよ」のように「誘いや依頼」と「承認」の言葉をセットで覚えられるような体験を重ね、相手の反応が「嫌」「ダメ」等の場合もあるため、少し待つことや受け入れてもらえなかった場合の方法（「いつなら良い？」「次に貸してくれる？」「じゃあまた今度ね」など）を示すことも大切です。

### ワンポイントアドバイス②

「一緒に作ろう」と声を掛けた後に、どのように一緒に作るかを援助することが大切です。例えば、作業順序は「どこから作る？」「頭を作る？」や、作業内容は「何色にする？」「長くする？」などのように一つひとつ具体的な言葉を添えて声を掛けましょう。相談が難しい場合、見本を用意し、同じように作ってもらっても良いと思います。言葉での役割分担は、お互いに忘れてしまうこともあるので、ホワイトボードなどに「頭→〇〇さん、手→△△さん、足→◇◇さん・・・」と掲示しておき、役割と違う場合は、掲示を指しながら促しましょう。

「上手くできているね」「早いね」など、お互いを労う言葉を支援員が率先して掛けると良いでしょう。

## 想定事例⑨【 小学校低学年 】

### 子どもの特徴

- ・感情の起伏が激しく、嫌なことは一切手につかない
- ・不穏になると、他者に対し暴言を吐いたり、手を出したりしてしまう
- ・体を動かすことよりも、パズルなどの微細運動を好む



### 支援内容

友だちと対戦形式のパズルゲームを行う

### 支援のねらい

得意なプログラムのため参加を促し、感情に任せた行動につながらないように、指導員が細かに声掛けを行うことで、感情的な行動を抑制したい

### Q-1

自分の好きなパズルゲームを選ぶように伝え、参加を促したのだが、今はパズルをしたい気分ではないようで、参加しようとせず、ずっと絵を描いている。どのような参加の促し方が必要か？

### ワンポイントアドバイス①

描いている絵がいつ終わり、いつからだったら参加できるかを聞いてみましょう。本人のタイミングで参加した場合でも、気持ちを切り替えられたこととなります。

また、「〇分からパズルを始めます」と予告し、子どもの参加する気持ちの土台作りをすることも大切です。事前にパズルゲームの戦略などを本人と話し合い、参加のモチベーションを上げることも、気持ちを切り替える方法の一つかもしれません。好きなことを手掛かりに参加を促すことも良いですが、子どもが「一人でする」ことが好きな場合もあるので、「皆とする」遊びを作っていく視点も持ちましょう。子どもの一つの様相もたくさんの要素から成り立っているなので、よく観察することが大切です。

### ワンポイントアドバイス②

いつも自分のペースで取り組むことができるパズルゲームに、対戦などのルールが設定されることは本人にとって大きな変化であり、応じにくい場合があります。受け入れてもらえないときは、子どもが好きなパズルゲームではなく、新しいパズルゲームやトランプゲームなど、別のものを選んでもらい、視点を変えて勝ち負けのある活動に参加を促した方が良いかもしれません。

活動の中で情動が動いたときに使える言葉（楽しい、悔しい、辞めたいなど）をいくつか想定しておき、実際の場面ではその中から自分の状況に合う言葉を選んでもらうことから始めましょう。練習を重ねていくと、書いたものがなくても対応できるようになっていくでしょう。

## Q-2

初めは機嫌良く参加していたので、遠くで見守り、勝ったときは「すごいね」、負けたときは「次、頑張ってみよう」などの声掛けをしていた。しかし、何度か連続で負けてしまったことで、最終的には友だちに向けてパズルを投げてしまったのだが、改善方法を教えてほしい。

### ワンポイントアドバイス①

連続して負けてしまって、悔しい気持ちになるのは当たり前のことです。感情の起伏が激しい子どもに対して、感情を閉じ込めようとする、ますます爆発してしまうことがあります。今回の場合は、「友だちに向けてパズルを投げる」という行為は不適切なので、悔しい気持ちをどう表現するかを一緒に考えてあげることが大切です。

行動を注意する前に、「負けて悔しかったね」と気持ちを汲み取り、子どもの気持ちに寄り添ってあげましょう。その上で、「悔しいときは、私（支援員）に、悔しかったと言いにきてね。負けてばかりでいやだ！と叫んでも良いんだよ」など、まずは不適切行動を言葉に変換できるように練習していきましょう。

### ワンポイントアドバイス②

負けを受け入れることが苦手な子どもには、褒め言葉を丁寧に選択して伝えていくことが大切です。機嫌良く参加できているのであれば、勝ったときは笑顔で頷く程度の評価にし、負けたときは「気持ちの切替え、良いね」「またチャレンジするの？頑張るね」「負けたらもうやらないって言わなくなったね、すごいな」など、丁寧にバックアップしてあげると良いでしょう。

その上で感情が溢れてしまったときには、まずは子どもを落ち着かせ、負けて悔しかった気持ちを受け止めつつ、自分を落ち着かせるための言葉や考え方（相手に「やめる」と伝える、「明日（次）は負けない」や「まあ良いか」と心の中で言うなど）を伝えていくことが大切です。

## 想定事例⑩【 小学校高学年 】

### 子どもの特徴

- ・自分の思うようにいかないときに注目を得るため、自傷行為を行ってしまう
- ・感情コントロールが難しく、気持ちを上手く伝えることができない



### 支援内容

小集団で各自机を準備し、算数ドリルを使った学習を行う

### 支援のねらい

分からない問題は手を挙げて知らせてもらい、支援員がヒントを伝え、正解に導くことで、自分では上手くいかないことがあっても、解決できることを示したい

### Q-1

解くことが難しい問題があるときに、質問をすることができず、制限時間いっぱいまで考えこんでしまわないようにする方法を知りたい。

### ワンポイントアドバイス①

時間の枠組みや解答方法のバリエーションを工夫することで、「本人の困り」を減らすことができると思います。例えば、時間の使い方を覚えてもらうために、制限時間内の流れを「シンキングタイム」「質問タイム」などと枠付けを行います。

「問題を読む」→「シンキングタイム」→「質問する」→「答える」というプロセスを踏んで問題に取り組む方法を設定すると良いでしょう。また、「答える」ときの選択肢として、「答える」以外に、「分からない」「教えてください」「後でもう一度考えたい」などとリストアップして示してあげましょう。

解答方法のバリエーションのリストは、他の活動でも使用できるように常に掲示しておくとも良いかもしれません。

### ワンポイントアドバイス②

質問をするということに慣れておらず、聞いて良いことなのかどうか不安に感じている子どももいます。その場合、分からないときに質問を受けるという方法ではなく、「質問（確認）タイム」を1回目、2回目などと複数回に分けて設定しておき、「質問（確認）タイム」のときに、質問がなくても「（これで良いかを）確認」する、または「（分かったことや今やっていることを）報告」という約束にし、自分自身を追い込んでギリギリの状態にならないように事前対策を検討しておきましょう。子どもが慣れてくれば、「質問タイム」の回数を減らすなど、時間内に課題を終える練習につなげていくことも良いかもしれません。

## Q-2

手を挙げて質問しようとしたが、支援員が他の子どもの対応をしていたため、対応できなかったところ、注目を集めるため自傷行為をしてしまう。自傷行為をしないようにするための方法を教えてほしい。

### ワンポイントアドバイス①

待つことに慣れない子どもの場合には、待つことに慣れるような指導を行います。初めは短い時間から待つ練習を行い、待てたことを評価します。本人の待てる時間を把握して小集団で、待てる時間の範囲内で待たせるようにします。また、小集団の中では、質問しようとしたときにすぐその行動を拾い「質問、良いね。タイマーが鳴るまで待って、次に行くからね」といつまで待てば良いのか示し、待てたことを評価します。

指導が上手く進まずに自傷行動が見られてしまった場合には、自傷行動には注目せずに、「質問はなんだった？ここかな？」と手が止まっている算数プリントの部分を焦点化し、本人の注意が切り替えられたタイミングで評価します。

### ワンポイントアドバイス②

「自傷行為をする」という方法によって、「周囲の注目を集められた。」という誤学習をしてきた可能性があります。注目してほしいときや助けを必要としたときに、より良い方法を身に着ける必要があります。そのため、「質問します」カードや「(あなたは)〇番目です」カードを用意しておく、順番を間違えたりすることなく、待つための見通しをつけやすくなります。また、順番を待っている間にすること(問題用紙の余白に質問内容をメモするなど)を、事前に子どもと話し合っておくと良いでしょう。イライラしてしまったときに自分でできそうな対処方法(ギュッと力を入れて拳を握る、目を閉じて数を数えるなど)を決めておくことで安心できます。

## 想定事例⑪【 中学生 】

### 子どもの特徴

- ・知っている人しか援助を求めることができない
- ・欲しい物への執着があり、友だちの物を勝手に取ってしまうことがある
- ・自分の気持ちを表現することが苦手



### 支援内容

商店街にお菓子を買っていく

### 支援のねらい

店員に話を聞かなければならない場面を作り、知らない人にも援助を求められるようにしたい

### Q-1

買う物を支援員と一緒に事前に確認した上で店に入るが、目についた欲しいものをすべて手に取ってしまう。事前の確認以外でどのような工夫があるか？

### ワンポイントアドバイス①

事前に子どもの理解力や判断力、記憶力等をアセスメントし、現時点でできていることや今後身に付けたいことを整理することが大切です。準備としては、商品選び、支払の方法、店の中で守るべきルールなど場面を絞って、簡潔に表したイラストや店内写真を確認できるようにしておくとも良いかもしれません。当日、困ったときに支援員が視覚的に示せるようにしておき、次の段階として自分でカードを見ながら買物ができるようにつなげていきましょう。

また、入店前に購入する物を確認（「〇〇を買いに来ました」等）し、目的の商品が無かったときの行動（代替品を買う、買わずに店の外で友だちが出てくるのを待つ等）も確認しておくことが大切です。

### ワンポイントアドバイス②

買物マナーとして「買わない物には触らない」など、事前に、買物マナーの学習を行い、どの程度事前学習で理解できたか、事業所内で、模擬設定をして練習すると良いと思います。スモールステップとして、何も買わないことを約束して、スーパー内を散策し、「何も触らずに出て来られたらシールがもらえる」というような支援を行い、シールが10個貯まったら、実際のお買物を実施するなど、本人の力に合わせて、経験の段階を踏めるような工夫も大切です。実際に買う物が決まったら、商品写真を用意して、マッチングしながら商品を探すと、写真にない物を手にしたときに、言葉だけでなく視覚で、それは買う物ではないという気付きを促せます。

## Q-2

欲しい物が見つからない場合、商品棚の掲示などを見るよう促しヒントを伝えるが、すぐに支援員に答えを求め、店員に尋ねることをしてくれない。店員に話し掛けるようにするにはどうすれば良いか？

### ワンポイントアドバイス①

最初は支援員と一緒に店員のところに行き、挨拶から練習をすると良いかもしれませんが。店員を見分ける方法（店の制服や作業着の特徴等）や、店員がどこにいるか（レジ、サービスカウンター等）を事前に確認し、店や商品のことは支援員ではなく、店員に尋ねる必要があると伝えておくことが大切です。

また、支援員は店員の近くまたは店員の方へ誘導できる場所で見守るようにし、子どもの援助要請にすぐには答えず、店員への援助要請の仕方や声の掛け方を子どもに伝えてください。

店員に対して質問や援助要請を上手くできたときには、具体的にどこが良かったかを評価し、次回につなげ、経験を積み重ねることで自信をつけてもらいましょう。

### ワンポイントアドバイス②

日頃から欲しい物を手に入れるための言葉のやり取りを丁寧に事業所で積み上げていくことが大切です。そのような経験の積上げが、初めての場所や初めての人に助けを求めることのできる土台作りになります。力をつけずに実施してしまうと失敗体験を積むような結果になってしまいます。買物活動の練習を、お店を訪問して行う場合は、事前にお店に了承を得て、協力をお願いをしておくことも大切です。話し掛けるシナリオカードを用意して、ロールプレイでやり取りを練習しておきましょう。その上で、可能なら、店員の写真か制服のみの写真カードを作り、事前に誰に話し掛けるのかを明確にし、本人が成功体験を積める援助を工夫しましょう。

## 想定事例⑫【 小学校高学年 】



### 子どもの特徴

- ・ 質問の内容は理解しているが、自分の考えを伝えることができない
- ・ 他の子どもと意見が異なることや間違ってしまうことを嫌う
- ・ 周りの影響を受けやすい

### 支援内容

穴抜きの作文の中に、好きな言葉を入れて、文を完成してもらう

### 支援のねらい

簡単な言葉を入れて完成できるものにし、自分の言葉で発表できるようにしたい

### Q-1

「〇〇して楽しかったので、次は●●してみたい」など、自分の体験について作文するときも、自信がないようになかなか答えてくれない。答えてくれたときは「よくできたね」と褒めるのだが、自信をつける方法を教えてほしい。

### ワンポイントアドバイス①

〇〇や●●に当てはまる言葉のリストを作って、その中から選択してもらうなど、子どもが答えられないことがないように準備をしておきましょう。さらに、褒めるときは、「よくできたね」という漠然としたものではなく、「〇〇が楽しかったんだね。先生も〇〇が楽しかったよ」「そうだよね、●●をまたしよう」と具体的に共感し、相手が理解してくれたと感じるように声を掛けてあげましょう。体験を表現することが難しい子どもの場合、見えない事象ではなく、見えたことを正しく表現する練習も良いでしょう。簡単な間違い探しは、「机の上の赤い本が青い本になっている」と伝えてもらうことも表現練習の一つです。

### ワンポイントアドバイス②

自分の考えや感じ方を言葉にする練習はとても大切なことですが、なかなか難しい課題でもあります。

例えばジャンケン等の場面で、出す手を決められない「戸惑いタイプ」なのか、出す手がいつも決まっている「パターン対処タイプ」なのかによって、対処方法は異なります。「戸惑いタイプ」なら、気持ちを引き出して言葉にするのを援助する必要があります。また、「パターン対処タイプ」なら、興味関心のあるもの以外は無頓着な可能性があるため、こちらからいくつかの活動を示して楽しかった順に並べてもらい、どの活動について話すか選択してもらいます。

両者とも子どもの負担を少なくし、回数を繰り返すことが自信につながります。

## Q-2

他の子どもが汚い言葉遣いで答えたので注意したところ、周りの雰囲気流されて同じように汚い言葉遣いになってしまいがちであるが、対処方法を教えてほしい。

### ワンポイントアドバイス①

支援員が汚い言葉遣いに過度に反応しないことも大切です。往々にして、他の子どもの暴言に対して大人が反応するので、自分も注目してもらいたくて、同じ行動をすることがあります。子ども達の反応は、大人の反応を鏡にしています。注意している場面が、注目行動と捉えられて周りの子どもが誤学習をしていることに、支援員が気付くことが大切です。『注意=否定』と受け取る子どももいるので、「汚い言葉」を指摘、注意するのではなく、「〇〇と言うと良いかもね」と言い方を変える促しの声掛けをすると、周りが穏やかに受け入れられる雰囲気になるかもしれません。支援員の言葉を振り返ってみることも、環境調整の一つになります。

### ワンポイントアドバイス②

適切ではない行動があったときは、可能な限り注意というより、アドバイスをしましょう。アドバイスに従って行動が変われば、すぐに「それで良いと思うよ」と反応し、大人言葉に耳を傾けることには意義があると知ってもらうことが成長につながります。

また、行動を具体的に示すことが大切です。周りの動きに注意が逸れがちなようなので、「ここを見て。読んでみるよ」などすべきことに注意を戻すことや、「5年生の準備だね、〇〇という言い方にしよう」など、分かりやすく訂正すると良いでしょう。子ども同士のやりとりは、大人から得た態度や言葉に自然と関わっているので、良い行動は積極的に評価することが、子どもに好循環を促すきっかけになります。

## 想定事例⑬【 小学校低学年 】

### 子どもの特徴

- ・片付けが苦手な身回りや自分のものを片付けられない
- ・周りへの影響を考えず、すぐに行動してしまう
- ・集中力の継続ができない



### 支援内容

クリスマスイベントの飾り付けのため、絵を描いたり、装飾物を作製する

### 支援のねらい

使用したハサミや鉛筆を指定の場所に片付けるまでを支援の一環としたい

### Q-1

片付ける場所が分かるように道具箱や棚に名札を付けたのだが、ハサミや鉛筆をまとめて1か所に片付けてしまう。他の子どもの「真似をしながら、片付けてみよう」と促しているが上手くいかないときはどうしたら良いか？

### ワンポイントアドバイス①

子どもが適切ではない行動をする中で支援員が注意を促しても、行動は修正されないことが多いです。子どもが片付けようと席を立ち、いくつもの道具を同時に手に持って指定の場所に移動したときに、仕分けようとしているのであれば、支援員は子どもに付き添って見守りましょう。もう少し支援が必要な場合には、一つずつ片付けて、戻って、を繰り返しながら片付けることを促すと良いと思います。片付けの途中に友だちと関わるなど寄り道する様子があれば、まずは環境調整を行い刺激の少ない場面で練習しましょう。

友だちの行動を見本とする場合は、行動を観察させ「〇〇はどこに置く」など言語化し、行動の自己教示をすると良いかもしれません。

### ワンポイントアドバイス②

見る力の弱さが考えられるので、まずは「見やすさ」を中心に環境設定をしていくと良いでしょう。作業がそれぞれのペースで進んでいると周囲と同じ動きにならないため、より分かりにくくなります。可能であれば「制作タイム」と「片付けタイム」を分けておくことで、他の子どもと同じ歩調になり、同じ用具を同じ場所に片付けやすくなります。道具の収納場所は、ハサミや鉛筆が丁度入るスペースにするなど、収納場所の違いを分かりやすくすると良いでしょう。

見る力が弱い子どもの場合、綺麗に片付ける方法の見本を示しながら、工程をイメージできるようにし、出し入れと片付けの練習をゲーム感覚で行えるような支援が良いと思います。

## Q-2

飾り付け担当だったが、飽きてしまい絵を描き始めてしまった。他の子どもが注意したところ、両者が陰悪な雰囲気となった。子ども同士で解決策を見つけてもらうために見守っていたのだが、支援員から声掛けやアドバイス以外にも解決に導く方法を教えてほしい。

### ワンポイントアドバイス①

飾り付け担当の役割について、子ども同士で話し合い、完成のイメージを事前に共有しましょう。また、飾り付けに必要な材料は使い切る量を準備することで、終わりが視覚的に分かるようになります。

終わるときには飾り付け担当全員で報告に来てもらい、支援員の許可が下りた後に、好きな遊びができることを確認しておきます。事前に確認しておくことで、ついうっかりその場を離れても、修正する行動を促しやすくなります。トイレに行くときや席を離れるときにも支援員に許可を求める必要があることを確認しておきましょう。対象児が友だちの声を受け入れて行動を変えたり、行動に注意を払っている場面は積極的に評価していきましょう。

### ワンポイントアドバイス②

注意がそれやすく、興味関心が持続しにくいようなので、途中で友だちと役割を交替して、他の役割も行えるようにすると、モチベーションが維持しやすくなります。子ども同士で話し合ってもらい、時間や作業量を考慮しながら、事前に交替のタイミングを決めておくといいでしょう。また、飾り付けの場所には、作業に必要な用具以外は置かずに、必要なものがすぐ手に取れるように、作業用の素材を入れた箱や道具用トレイなどを準備しておくといいでしょう。作業の進み具合を確認しながら、労いや褒め言葉などを伝えてください。

支援員が子ども同士で声を掛け合うモデルを示すことで、作業に一体感が生まれ、作業自体が単調にならず飽きにくくなります。

## 想定事例⑭【 小学校高学年 】



### 子どもの特徴

- ・好奇心が強く、後先を考えずに行動してしまう
- ・本当は嫌なことでも嫌と言うことができない
- ・好き嫌いがはっきりしている

### 支援内容

課外活動として公園に行く

### 支援のねらい

気になることがあっても、冷静に行動できるようにしたい

### Q-1

好きなキャラクターの看板を見つけた際に、急に走り出してしまうことがあるため、常時、支援員が手をつなぎ、「一旦、落ち着こう」「周りをよく見よう」などと注意を促している。一人の場合でも危険な行動にならないようにするためにはどうすれば良いか？

### ワンポイントアドバイス①

まず、一人で外出する機会（近所の公園に行く等）があるかを確認してください。慣れている場所でも飛び出すなどの危険な行動がある場合は、危険認識が薄いため、危険な場所（横断歩道、歩道がない道路、交差点等）での安全確認を一緒にしましょう。また、初めての場所で気になるものがあるときに飛び出してしまう場合は、「見たい」「行って良い？」等と、まずは言葉で伝えてもらうようにします。言葉で伝えられたら褒めるとともに、一緒に近づいたり、目的地に向かいながら見るなど、子どもと一緒に楽しむことを大切にしてください。

外出時は子どもの視線に注意し、気になるものがどこにあるかなど、安全面に十分配慮することも必要です。

### ワンポイントアドバイス②

対象児のような子どもには、日常生活の中で様々な自己抑制の体験を積んでもらうことが大切です。例えば、おやつが目の前にあっても「今は見るだけね。皆と一緒にいただきますするよ」など、まずはどのくらい自己抑制できるかを把握しましょう。また、事業所内で統制がつくようになっても、屋外では、刺激が多く統制がつきにくいものです。公園内では、すぐに駆け付けることができる距離を保ちながら、支援する必要があります。突発的で危険な行動を起こさないようにするには、「周りの大人に了承を得て行動する必要があることに気付く力」や「危険な行為についての認識する力」など、様々な力を獲得する支援を積み上げていきましょう。

## Q-2

公園の遊具で順番待ちをしていたときに他の子どもに順番を抜かされたても、「イヤだ」や「やめて」と言うことができない。他の子どもに対し、順番を抜かさないように注意することも可能だが、自分で「イヤだ」と伝えられるよう促すためにはどうすれば良いか？

### ワンポイントアドバイス①

我慢するとストレスが溜まってしまうため、まずは他の子どもとともに「〇〇さんの後ろ」等の順番を守るルールを確認しましょう。

次に「僕（私）がここだよ」「違うよ」等の言葉を教え、小集団で実体験に近い練習をします。支援方法は①支援員が代弁する、②支援員と一緒に言えるようサポートする（「そういうとき何て言ったら良い？」等）、③一人で言う、などと段階的にすると良いでしょう。実際の場面で一人で言えたときは大いに褒め、一人で言えないときは、友だちや支援員に援助を求める方法（「〇〇されて嫌だ」「順番を抜かされた」等）を伝えましょう。嫌な気持ちを信頼できる人に言えるような、ストレスを貯めにくい環境づくりが必要です。

### ワンポイントアドバイス②

本人はどのくらい順番を抜かされたことを嫌だと感じているのでしょうか。本人の中で嫌な気持ちの度合いが小さければ、訴えていく気持ちが高まっていない状態です。また、前の子どもと距離が空いていて、並んでいないと判断されている場合もあります。それらを観察し、支援を検討することが大切です。自分で伝えられるような力を付けるには、支援員がわざと順番を抜かして、子どもが「順番抜かしたよ」と言う練習をしましょう。支援員は、「教えてくれてありがとう。気が付かなかったよ」と言ってくれたことを感謝するような返答をしてください。注意することが悪いことではなく、相手も助かることだという気付きを促すような方法があります。

## 想定事例⑮【 小学校低学年 】

### 子どもの特徴

- ・自分の困りごとの言語化が難しく、上手く質問ができない
- ・人見知りで友だちに「一緒にしよう」などの声掛けができない
- ・一人で黙々と作業をすることを好む



### 支援内容

小集団によるおやつ（パンケーキ）作り

### 支援のねらい

手が止まっている子どもに対しては声掛けを行うが、支援員によるサポートは最小限にし、子ども同士協力しておやつを作ってもらいたい

### Q-1

手が止まっていたので、「〇〇さんにどうやったら良いか聞いてみたら？」と声を掛けたのだが、上手くいかなかった場合はどうすれば良いか？

### ワンポイントアドバイス①

声掛けが苦手な子どもなので、「これで良い？って一緒に聞いてみよう」と、まずは支援員と一緒に行動するように促してみても良いでしょう。また、大人に困ったことを伝えられるように「どうしたら良い？って（私に）聞いてくれる？」と支援員にヘルプを言う練習をしておき、上手にヘルプが言えたときは「もちろん、喜んで！」と大げさに喜び、仲介役として聞いてあげましょう。助けを求めると喜んでもらえる、そして助けてもらえることが、友だちに困りごとを伝えたい第一歩です。困りごとだけではなく、嬉しかったことを伝える練習も必要かもしれません。「できた！って見せにきてね」と伝えておき、人と関わる機会を作りましょう。

### ワンポイントアドバイス②

子どもが臨機応変な力を求められる調理の場で逃げ出さずに何らかの役割を担い、結果食べるところまで友だちと過ごすことができれば、それだけで十分な社会参加だと感じます。一人で黙々と作業をするより、明らかに負担感が高いため、その場に参加して楽しむことができたなら、それは「よく頑張っているね」と言える場面かと思えます。手が止まっているときは何をしたら良いか分からない状態のため、「一緒にやろう」と支援員が声を掛けて、いろいろな役割を経験してもらおうと思います。

経験を積み重ねる中で、少しずつ余裕が出てきたら、協力場面を足していき、コミュニケーションの機会も盛り込んでいきましょう。

## Q-2

おやつ作りが得意なため、他の子どもから質問されることがあるのだが、上手く答えられない。支援員が「今何したんだっけ?」「〇〇入れたんだよね?」などの声を掛けても、答えを引き出すことができないのだが、他に方法はあるか?

### ワンポイントアドバイス①

受け答えが苦手な子どもには、質問形式で促すのではなく、「〇〇って言ってあげて」と答えを示すことがスモールステップです。復唱する形でも、友だちに言えたら褒めてあげましょう。まずは、受け答えの内容より、相手に声を出して伝える大切さを感じてもらうことが重要です。支援員が答えを示し、受け答えの言葉の引き出しを増やす経験を積み重ねることで、自分の言葉で答える（どの引き出しを使うか）という力がついていきます。支援員が子どもに対し、自分の言葉で表現してほしいという思いが強すぎると、本人のプレッシャーになることがあります。

子どもの段階を把握し、子どもが負担を感じずに成功体験を積めるように丁寧に考察しましょう。

### ワンポイントアドバイス②

事前におやつ作りの解説動画を作るなど、作業内容の説明や解説を子どもに見てもらおうようにすると、質問に受け答えをする準備につながります。作業を行なっている最中に、臨機応変なコミュニケーションをすることは、心と頭に余裕がないと難しいものです。子どもが理解した上で、既にできている行動の中で、質疑応答という課題にチャレンジするには、説明ができるよう事前準備が必要です。作業を行なっている最中の質問の場合、質問してくる友だちの言葉を把握できたか、または把握できていないかを確認しながら進めましょう。答えることができたときには友だちから「ありがとう」「了解」等の反応が得られるようにすると、より良いと思います。

## 想定事例⑩【 小学校高学年 】

### 子どもの特徴

- ・ゲームのルールを守れず、自分好みのルールに変更してしまう
- ・力加減が苦手で、常に強い力で接してしまう
- ・負けず嫌いで、勝つまで終わろうとしない



### 支援内容

課外活動として公園で鬼ごっこをする

### 支援のねらい

勝ち負けがあるゲームの中での立ち振る舞いを覚えてもらい、感情のコントロールをできるようにしたい

### Q-1

事前に「このくらいの強さだと痛いよ」と力加減を伝えており、最初のうちは問題ないが、感情が高ぶってくると他の子どもに対し、力強くタッチしてしまうことを防ぎたいのだが、何か方法はあるか？

### ワンポイントアドバイス①

鬼ごっこのような運動遊びの中で感情が高ぶってしまうことは、低学年の子どもにはよくあることです。年齢が上がるに従って自分の感情の変化に気付けるようになりますが、友だちの反応を見て自分が失敗してしまったことに気付くことができても、次に活かすことは難しい場合が多いです。

事前に練習したことは積極的に取り入れようとしているようなので、まずは情動が上がってきていることを周囲が気付いて本人に伝えましょう。また、支援員から決めておいた危険信号の合図を受けたら「自分の行動を調整する」という練習を積み重ねてはどうでしょうか。スタッフの遠くからの合図に気付けるようになる頃には、自分で調整できるようになるでしょう。

### ワンポイントアドバイス②

「力の物差し」を作成し、力の大きさを他のものに置換え、イメージをしやすくする方法があります。例えば、「レベル1」は友だちの肩をトントンして話し掛けるとき、「レベル2」はお母さんの肩叩き、「レベル3」はドッジボールで味方にパスするとき、「レベル4」はドッチボールで敵にボールを当てるときなどで示します。実際には、対象児に合った表現が良いでしょう。「力の物差し」のとおりにやってみて体感することで、感覚をつかむことができると思います。また、鬼ごっこのように相手にタッチする遊びの場合、タッチできる箇所を「肩・背中・手」などと決めることで、「力の物差し」を思い出すきっかけになることもあります。

## Q-2

最後に負けて終わることが嫌なので、自分に有利になるようルールを変更してしまう。周りの子どもはそのことを理解しているため、渋々了承するのだが、支援員が介入し「ルール変更は禁止」とした方が良いか？

### ワンポイントアドバイス①

遊びの中で勝つために自分に有利なルールに変更してしまうことは、いずれ周りの子どもから受け入れられなくなります。負けて終わることが嫌と言う認知を変えていけるよう学習を積み重ね、行動を変えていきましょう。

負けてしまったときに、「少しその場を離れて一息つく」、「また頑張ろうと言葉にする」、「深呼吸をして力を抜く」などを促し、負けによるストレスをコントロールできるように様々な場面で練習すると、負けを受け入れられるようになっていきます。本人が負けを受け入れられる準備ができてきたら、「ルール変更を禁止する」、「事前にいくつか案を出し合って、ルールを決める」など、ルールについての学習を入れていくことが有効です。

### ワンポイントアドバイス②

勝敗があるゲームであれば「勝ちたい」と思うのは当然ですが、年齢が上がると、負けても「嫌だったけど、仕方がない。」と気持ちを切り替えられるようになります。その切替えが上手くいかず、負け（失敗感）によって、ストレスを感じている場合は、まず「鬼」になったとしても楽しい、面白いと感じられるゲーム（「フルーツバスケット」や「ハンカチ落とし」など鬼がゲームを主導できるもの）から始めて、「負け」に対する感情を緩和するようにします。遊びやゲームが子どもの発達段階に合っているかを考慮しながら、スモールステップとして、鬼の役割に慣れることから始め、勝敗がはっきりしているゲームへ段階的に変えていくと良いでしょう。

## 想定事例⑰【 小学校低学年 】



### 子どもの特徴

- ・自分が納得するまで次の行動に移すことが難しい
- ・計画を立てることが苦手で優先順位をつけることができない
- ・手順どおり進まないと気が済まず、少し違うだけでパニックを起こしてしまう

### 支援内容

文字や線をなぞる、色を塗る、花の名前を答えるなど短時間で様々な課題を行う

### 支援のねらい

短時間で行うことで意識や頭の使い方などの切替えをできるようにしたい

### Q-1

物ごとのに慣れてもらうため、事前にいつもと異なる順番で行うことを伝え、パニックにはならないが、時間がかかってしまう。毎回、変更するたびに、同じような反応となり、時間短縮につながっていかないのだがどのようにすれば良いか？

### ワンポイントアドバイス①

毎回の変更に対する不安が強いようなら、今の段階では変更を経験することは本人の自信にはつながらず、ストレスにつながっているため注意が必要です。短期的な目標を本人と一緒に立てて、変更の回数を設定（例えば1か月単位の活動表に課題の変更予定と変更理由を書き、自分で変更を確認したり、支援員と一緒に確認できるようにしておく）してください。また、急な予定変更があった場合は、気持ちのフォローを優先しましょう。短期的な目標が上手くいけば、変更する間隔を短くするなどの変化に慣れる環境設定や中長期的な計画を立てて、自分で見通しを立てられる工夫をすると良いでしょう。

### ワンポイントアドバイス②

「時間短縮」をねらいにするのであれば、①文字や線をなぞる、②色を塗る、③花の名前を答えるに課題を分けて、別々に時間を測りながら練習を行い、作業速度を上げる意識を育ててはどうでしょうか。一つの課題が終わるごとに、早く終わらせるための工夫や改善できる点などを確認し、次のときに作業時間が短縮できるように意欲を高めます。時間内にできる目途が付いたら、それぞれの課題を3つの課題箱に分けて、課題箱にその日の順番の番号を振り、いろいろな順で同じ課題に取り組むようにします。目の前に課題箱があり、終わると課題箱がなくなるような流れを作ると、作業の見通しとゴールを意識することができると思います。

## Q-2

各課題について時間配分を示しているときは問題ないが、始まりと終わりの時間のみを示した場合、一つ目の課題で納得できないと次の課題に進むことができない。自分で時間配分を上手くできるようにするにはどうすれば良いか？

### ワンポイントアドバイス①

例えば10分間位の短い時間内で2つの課題を設定し、どちらの課題の方が早くできそうか等の予測を立てて課題に取り組んでもらいましょう。次に自分で時間配分の計画を立ててもらい、実際にそのとおりに終わることができるか時間を測って取り組みましょう。最初の課題で納得がいかず時間がかかってしまうことも予想されるため、その場合は終わりの時間を守るようにして、次のときに続きをするか、宿題にするか、終えられなかった課題は諦めるかななどを、本人が選べるようにすると良いでしょう。

どれを選択しても良い悪いではなく、自分で決めることが大事であると伝え、自分で決めたことを守れた場合は、肯定的に評価するようにしましょう。

### ワンポイントアドバイス②

始まりと終わりの時間のみを提示した場合でも、そのまま取り組むのではなく、支援員と相談しながら、自分で一つの課題にかかる時間の見通しを立ててもらい、予測時間を書くようにしましょう。課題を繰り返し練習した後であれば、予測時間を考えられると思います。また、砂時計、タイマーなど、時間を視覚化でき、決めた時間が近付いていることに気付く手立てを用意しておくとう良いでしょう。まずは一つの課題の量を考慮し、自分で上手く配分できる課題を提供することで、成功体験を積んでもらうことが大切です。成功体験を積むと、作業に意欲的になり、納得がいかななくても「時間内に終わらせる」という気持ちを育むことにつながります。

## 想定事例⑱【 小学校高学年 】

### 子どもの特徴

- ・言葉遣いが乱暴で、命令口調で話してしまう
- ・相手の感情を読み取ることが苦手
- ・上手くいかないと癩癩を起こし、友だちや支援員に対し、暴力的な行動になる



### 支援内容

写真と同じ状態になるように言葉で身体の動きを相手に伝えるゲーム

### 支援のねらい

指示をするときや返答をするときの口調が乱暴にならないよう、適宜ヒントを与え、場面に応じた言葉遣いを覚えてもらいたい

### Q-1

上手くいかないと「手を前に動かせ！」など語気が強くなるので、支援員がお願い口調にするように訂正を促すのだが、注意されたことに腹を立てて暴れてしまうことがある。腹を立てるときと腹を立てないときの違いを見付ける方法を教えてほしい。

### ワンポイントアドバイス①

支援員からの訂正を子どもが注意（叱る）と受け止めてしまうと腹を立てることがあります。お願いする表現や、支援員自身が怖く感じて悲しかったなど、子どもが責められたと感じないような視点で伝えましょう。

感情の起伏がある子どもだと分かっているので、伝え方の言葉をリスト化しておき、子どもと一緒に確認した上で、そのリストに沿って表現してもらおうルールにしても良いかもしれません。感情のコントロールが必要な子どもに対し、「感情に蓋をする」支援になりがちなときがあります。誰でも怒りの感情は持つものです。怒りの感情を受け入れつつ、表現の仕方を言葉に変換して、自分で気持ちを収めていく力がつくように支援していきましょう。

### ワンポイントアドバイス②

「自分の行動を変えることには意味がある」ということを理解できれば、子どもは支援員のアドバイスを受け入れることができるでしょう。

受け止めにくい子どもに訂正を伝えるときには、伝えるタイミング（いつ）、誰が伝えるのか（誰が）、良い行動の評価内容（どのように）を意識しながら伝えることが必要です。その方法は事前に支援員間で統一しておきましょう。また、表現を肯定から入ることを意識して「そうね、言い方は〇〇と言うのが良さそうね」

「そうね、もっと良い言い方をリストから選んでみようか」等の言葉を選んで訂正しましょう。

いくつかを組み合わせて工夫しながら声を掛けることで、腹を立てやすい条件やNGワードが見えてきます。

## Q-2

相手が指示を間違うと、「なんで間違っただの？」などと問い詰めてしまう。相手から謝罪があったとしても、自分が納得するまでは、質問をやめないため、支援員がどうすれば許してあげられるのかを聞いても、自分自身も答えがないみたいだがどうすれば良いか？

### ワンポイントアドバイス①

例えば、指示を受ける側に、表情カード（にこにこ：分かったカード、困った表情：分かりづらいカード）を作り、指示に対し、カードを提示して気付いてもらうステップを組み込みましょう。支援員は、にこにこカードを出しやすくなるような声掛けになるようにサポートします。「なんで間違っただの」の言葉の裏には、「その指示では自分は分からないよ」という自分へのいら立ちもあるのかもしれませんが。それでも、友だちを問い詰めるような場面になったときには、本人が怒りを終結するタイミングを示すため、「はい、友だちもごめんねと言ったから、これでおしまい」と場面を切ってあげることも大切です。

### ワンポイントアドバイス②

まずは、課題の評価方法について、事前に子どもたちと共有するため、①写真とそっくりかどうか、②協力できたかどうかの2つの基準で行うことと、どのような言葉や行動が評価につながるかをホワイトボードに示し、良い行動を明確化します。指示する人と身体で表現する人がチームのため、どちらかが相手を責めたときには「その言葉は台無しなのでこの回は中断だね」と伝えて、①②ともノーカウントにします。適切な行動にはコメントしてプラスポイントを積み重ねていき、言葉による評価も足していきます。不適切な行動には反応せず、「協力が上手くいきはじめたね」「なかなか良い組合せだね」など、ひたすら良い行動を拾っていきましょう。

さいごに

本ガイドは、ソーシャルスキルの獲得によって、障害児通所支援事業所に通う子どもが成長し、社会に出で行くときに少しでも困難のない生活を過ごすことができる一助になればと考えて作成しました。

ソーシャルスキルが完璧で、問題が全くない人はいません。そのため、子どもに完璧を求めることも必要ありません。社会生活を営む中で、困ったことや上手くいかないこと、自分には理解できないことなどはたくさんあります。その際に、一人で解決できるのか、他者に助けを求めることができるのかを子ども自身が理解できていることが大切だと考えます。SST を通して、支援員が子ども一人ひとりの状態を理解することはもちろんのこと、子どもたちが自分のことを理解することも重要です。子どもが過ごしやすい環境を作ることも良いですが、必要に応じて、子どもが少し困った環境の中でどのように対処するのかを観察することも、子どものソーシャルスキルの状態を確認する方法の一つです。子どもに関わる「大人たち」が、子どもの現状の発達段階を理解し、身に付けるべきソーシャルスキルは何なのかを考え、子どもに適した支援を行うことが必要です。

最後に、SST モデル事業に携わっていただいた心理士の皆様に、3つのテーマ「保護者や関係者との支援内容の共有の必要性」「SST につながりやすい支援方法や支援環境」「モニタリングやアセスメントの着目すべき点」について、コラムを作成していただきました。今後のSSTの参考にしていただければ幸いです。



## 「保護者や関係者との支援内容の共有の必要性」

放課後等デイサービスにおける保護者支援は、「子どもまんなか」のアプローチを基本とし、生活に根ざした支援を提供することが重要です。保護者と共に長い時間軸で成長を見守りながら、子どもたちが自由度のある活動を通じて成長できる環境を整えることが求められます。

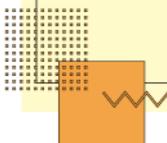
まず、「子どもまんなか」のアプローチでは、子どもの個々のニーズや興味を尊重し、彼らが主体的に活動できるよう支援します。これにより、子どもたちは自信を持ち、自分自身の成長を実感することができます。例えば、特定のテーマに沿ったプロジェクト活動や、興味のある学問分野への探求を支援することは、子どもたちの学ぶ意欲を引き出します。自由度のある活動を提供することで、子どもたちの自主性や創造性を育むことができます。例えば、事業所の特徴を活かし可能な範囲でアート、スポーツ、音楽、プログラミングなどの多様な活動を提供し、子どもたちが自分の好きなことに取り組む機会を増やします。これにより、興味を持った分野でスキルを身に付けることが可能になります。

また、生活に根ざした支援を提供することで、日常生活の中で学びや成長の機会を増やすことができます。家庭や地域社会との連携を強化し、例えば地域の図書館での読み聞かせイベントや、地域のスポーツクラブと連携して活動することで、子どもたちは多様な体験を通じて成長できます。

放課後等デイサービスの特徴として、保護者と共に長期的に成長を見守ることができることが強みです。定期的な面談や情報共有を通じて、保護者との信頼関係を築きます。例えば、保護者面談では子どもの成長や課題について話し合い、保護者の意見や要望をタイムリーに拾い上げます。また、アンケートを利用したフィードバックの収集も有効です。

さらに、保護者の生活からニーズを正確に理解し、それに応じた支援を提供することも重要です。例えば、保護者が子どもの宿題のサポートに困っている場合は、放課後等デイサービスで宿題の時間を設けることで、保護者の負担を軽減します。定期的に保護者の意見を聞き、それに基づいて支援内容を見直すことが、保護者満足度の向上につながります。

【次ページへ続く】





放課後等デイサービスでは、関係機関との連携も欠かせません。保護者・学校・地域社会と協力しながら、子どもたちの成長を支えます。例えば、学校との連携を強化し、学業成績の共有や特別支援が必要な場合の情報交換を行います。また、地域社会との連携を強化し、地域の施設やイベントを活用して子どもたちの社会性を育てます。地域のボランティア活動に参加することで、子どもたちは社会貢献の意識を高めることができます。

子どもの安心安全を確保するためにも、関係機関との連携は重要です。不測の事態に対応するための体制を整え、予防策を講じます。例えば、防災訓練を定期的実施し、緊急時の対応方法を子どもたちに教育します。また、相談機関としての役割を理解し、必要に応じて適切な支援機関と連携することも大切です。

保護者の心理的サポートも重要です。保護者が子どもの成長や発達に対して感じる不安やストレスを軽減するための心理的サポートを提供します。例えば、カウンセリングやサポートグループを提供することで、保護者が安心して子育てに取り組むことができます。

現代の教育において、多様な背景を持つ子どもたちが共に学ぶ環境は、子どもたちが多様性を尊重し、理解する力を育てます。また、テクノロジーの活用も避けて通れません。例えば、オンライン学習プラットフォームや教育アプリを活用することで、子どもたちが自分のペースで学習できる環境を整えます。また、保護者とのコミュニケーションにもテクノロジーを活用し、情報共有をスムーズに行います。

放課後等デイサービスにおける保護者支援や関係機関との連携は、「子どもまんなか」のアプローチを基本とし、生活に根ざした支援を提供しながら、保護者と共に長い時間軸で成長を見守りながら、子どもたちが自由度のある活動を通じて成長できる環境を整えることが求められます。

以上のポイントを大切にしながら、子どもたちの健やかな成長を総合的に支えることができるでしょう。





## 「SSTにつながりやすい支援方法や支援環境」

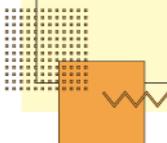
支援環境を考える上でまず大事なことは、子どもの側から見た「安全で安心できる環境作り」だと思います。この場所に来て怪我をしない、心が傷つかない、自分を分かってくれる人がいる、必要なときには手助けや応援をしてくれる人がいる、活動時間や空間が分かりやすい自分の居場所になっているなどが主なポイントだと思います。

私たち大人は「このような環境であれば大丈夫。支援しやすい。」などという大人の見方になりがちですが、子どもの視点で考えるためには、時には子どもの目の高さまでしゃがみ込んで施設全体を見渡したり、施設・設備の配置や教材の位置関係などを確認したりすることも必要でしょう。

SSTを行う前に、その場所で子どもたちが課題に関心を寄せて一定時間注目し続けられるかどうかチェックすることをお勧めします。注意の持続時間は個人差がありますが、事業所を利用している子どもたちの中には刺激に反応しやすく注意の維持が難しい場合もあります。このため、支援開始の前に行う一人ひとりの実態把握がとても重要です。集団活動時と個別活動時では必要な環境の違いもあると思いますが、環境設定について一般的に共通する配慮点を幾つかあげてみます。

1. 利用時の自分の居場所が分かる（活動室や座席の設置、個々の座席表示がはっきりしている、自由席の場合は、個々の着席のルールなどが分かりやすくなっているなど）
  2. 活動の開始時刻や終了時刻と主な活動内容が表示され、必要なときに子どもが自ら確認することができる
  3. 活動開始時の集合場所や準備・片付けの仕方が明示されていて使用ルール（誰と一緒に使うか、個別に準備されているかなど）がはっきりしている
  4. 休憩時間の居場所や過ごし方、遊び方のルールが明示されている、気分転換用のリラクスペースがあり、使用ルールが明示されている
  5. 分からないことや困ったことがあったときに、尋ねたり援助を求めたりできる環境になっている（求めれば助けてくれる人がいる、援助を求める方法が分かりやすいなど）
- これらはあくまでも一般的な例ですので、この他にも施設の特色や支援方針により異なる配慮点があると思われます。特色を活かした環境設定を子どもの視点に立ち、支援員同士で日々話し合いながらより良い環境作りを目指していただければと思います。

【次ページへ続く】



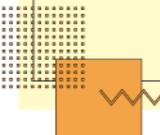


さて、ハード面の環境が整ったら次はソフト面のお話に入ります。

「SSTに繋がりやすい支援方法とは？」というお題を頂きました。各支援機関では将来の社会参加だけでなく、今参加している学校社会や地域社会、友だち環境にその子どもなりに対応していくスキルを身につけていくために、必要な支援を日々行っているんじゃないかと思います。SSTのプログラム内だけでなく、自由時間や活動ごとの準備・片付け、遊び時間など、その施設内で行っている全ての活動で意図的に支援をしていかなければなりません。私たち大人はともすると、子どもの困った行動に目が行きがちで、その行動をどのようにやめさせたら良いかを一生懸命に考えます。けれども少し見方を変えて、まず日常の活動中にできる実態把握（インフォーマルなアセスメント）を試してみることをお勧めします。それらの困った行動の前後に起こった出来事や周囲の環境（他の子どもや大人の反応など）から行動の意味が見えてくる場合があります。難しい場合があるかと思いますが、メモ程度でも良いので複数の支援員が記録に残しておくことで、後から冷静に分析して今後の支援につながられます。支援員の経験や支援に関する価値観などによって記録内容が若干異なることがありますので、その場合、フォーマルなアセスメント結果（認知検査や知能検査、発達検査など）があれば、分析がより客観的になります。

また、一人ひとりの良い点を集団に広げていくこともSSTには必要です。挨拶や返事ができるなど、子どもの小さな強みや長所を見付ける目を大人自身がいつも持っていてください。

これらのことは支援を担う大人の心にゆとりがないと難しいかもしれません。支援員自身が心身ともに健康であり、その上で「子どもの視点で考えようとする事」や「良さを見つけようとする事」、「子どもの心を守り支えようとする事」、「子ども自身が考えたり挑戦したり、失敗から立ち直ったりする経験を後押しすること」「子どもが自分の力だけでは難しいと感じたときにタイミングよく援助を求める方法を一緒に考えていくこと」、「子どもが決めたことに挑戦できるチャンスを用意すること」などが大事ではないかと思っています。



東洋大学 非常勤講師・星井 純子



## 「モニタリングやアセスメントの着目すべき点」

対象児とその家族のニーズに合わせて適切に支援計画を立てて支援を実行し、効果を確認するには「モニタリング・アセスメント」はとても大切な作業です。

まず、通所することが決まり、保護者や本人との初回面談から準備が始まります。生育歴や医療、服薬など書類上の聴き取り項目があると思いますが、どのようなことに困り、何を事業所に求めているか、しっかりと聴き取り共有する必要があります。その上で、事業所ではどのような支援を提供できるかを説明し、今後、対象児の子育てを協働するパートナーとして信頼関係の形成（ラポール形成）を築く面談でもあります。この時点で、これからの育ちの経過観察（モニタリング）の協力や対象児の成長に合わせて支援の見直しのための定期的な面談を行うことを伝えておきましょう。

保護者や本人から情報を聴き取れたら、アセスメントを行います。情報の中には、過去の検査結果（フォーマルアセスメント）を頂くときもあると思います。また、他の関係機関の評価や情報も大切なアセスメントの資料の一つになります。フォーマルアセスメントの分析には、ある程度、その検査や評価表を理解して、読み取る力も必要です。事業所に熟達者がいない場合は、専門家に依頼し、事業所の支援チームに加わってもらうことも必要かもしれません。アセスメントの結果、支援内容・支援プログラムを立案するわけですが、通所が始まった1カ月間くらいは行動観察（インフォーマルアセスメント）の時期でもあります。一人の目で見るとはならず、支援員それぞれが観察眼を持って、細かい記録を取ることが大切です。事業所で共通理解ができるように、具体的・客観的に記入します。それらの記録をもとに、支援目標の内容が妥当であるか、目標に向けての環境設定やプログラムの確認をして、本格的な支援が始まります。この意識を支援員一人ひとりに持ってもらうには、事業所の管理者や児童発達支援管理責任者の働きかけは重要です。働きやすい職場としての配慮も大切ですが、支援員が対象児の育ちを保証するという自覚を持って、支援にあたってもらえるように、一人ひとりがスキルアップを図ることができる場を作ることが、対象児への支援の土台作りにもなります。

【次ページへ続く】





支援目標が定まり、支援が始まった後は、一定の期間を経て、モニタリングを行います。モニタリングは、対象児の生活圏内、家庭や学校、関係機関から情報を頂けるとモニタリングに深みがあります。支援方法が上手くいき、課題が解決に向かっている兆しがあれば、支援の継続やステップアップなどの検討をします。変化が見られない、または、悪化しているような状況があるときには、支援の見直しなども必要です。対象児によっては、季節（花粉症・行事が多い時期）で気持ちの波があり、様々な要因の影響を受ける児童・生徒もいますので、それらを考慮しながら支援評価を行います。PDCA（計画・実行・評価・改善）サイクルのように、支援のサイクルを作ることで、いつも最善の支援提供ができるような事業所の自助努力が必要です。

最後に、モニタリングやアセスメントの着眼点を3つ提示します。

1. 支援は「家族や生活圏の機関との協働作業である」という認識をもつことです。もちろん、事業所内の支援計画を立てるのは該当事業所ですが、対象児の特性が理解され共通の支援を考えることや日常に般化されているか確認するには、家族や他機関の協力も重要です。家族に、子育てのパートナーであるという認識を持っていただくことが、対象児の環境づくりでもあります。
2. 支援員一人ひとりが、自分のフィルターを通して見ていることを自覚し、極力、フィルターを薄くする（客観性）ことを意識しながら、支援をすることが大切です。支援員がしたい支援をするのではなく、対象児にとって必要な支援を提供するわけです。対象児が大人になり社会の一員として、社会生活を営めるような、将来を見据えた土台作りのための支援でもあります。往々にして、今この瞬間の困りごとに注目してしまいがちです。支援員自身が支援を客観的に自分で評価できるような力をつけましょう。
3. 家族も含めて、支援員が共通理解できるように、具体的な言葉を使う意識を持つことです。記録を見ると「落ち着きがない」という言葉が乱用されてますが、この言葉を読んだ人には、「そうかこの子は落ち着きがない子なのか」と単純なラベル貼りの言葉になってしまいます。「椅子をがたがたしていた」「おやつの時間に他児のおやつを確認するために離席した」など、具体的な様子を記録することで、どのような環境設定が良いか、どのような支援を行ったら良いかが見えてきます。極力、概念の言葉を乱用せずに具体的な表現をするように心掛けましょう。

以上の着眼点を意識しながら、対象児の理解を深めるために、アセスメントやモニタリングを行ってください。

一般社団法人ぼろんのいえ 富樫京子

